

---

# 機動戦士ガンダム 届かなかった祈り

ひろしS

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

機動戦士ガンダム 届かなかった祈り

### 【Nコード】

N9097P

### 【作者名】

ひろし

### 【あらすじ】

パソコン不調の為、暫く見辛い状態が続きます。第二話投稿完了まで、閲覧をお待ち頂く事をお勧めします。

第一作の更新が行き詰まったので、気分転換に始めたものです。更新は超がつくスローペースで行います。ご了承下さい。

モバゲータウンで強制非公開になったものを持ってきたものです。100ページ近く進んでいたの、埋もれさせるのももったいない、

ということを持ってきました。

物語の舞台は、第2次ネオ・ジオン戦争（「逆襲のシャア」参照）が始まる少し前。

一年戦争の終結後、宇宙世紀0090年頃から、サイド1の難民収容コロニー「スウィート・ウォーター」の処遇を巡り、第1次ネオ・ジオンの残党が再び動き出した頃。

戦争を止めようと目論んだ、普通の高校生が主人公。その幼馴染みがヒロイン。

だが、彼らの目論見とは裏腹に、戦争は開始され、彼らは変えることの出来ない運命に翻弄されていく。

本格的にシャアが動き出した0093年までの流れを描いた物語。

途中、アムロ・レイなど、既出の人物が出ます。彼らの描写がかっこよくなければ気に入らない方は、今のうちに他作へどうぞ。

テレビ版 およびZZガンダムの流れを踏襲して描きますので、結構、鬱陶しい描写や、口調がきつめの描写が多くなります。

しばらくは経緯の説明となるシーンが多く、戦闘シーンは殆ど出ません。悪しからずご了承ください。

プロローグは、ZとZZ、その後までの流れを説明しただけですの  
で、ご存じの方は流して本編へお進み下さい。

## プロローグ（前書き）

パソコン不調の為、暫くの間、見づらい状態が続きます。第2話  
投稿完了まで閲覧をお待ち頂く事をお勧めします。

このストーリーはあくまでも素人の趣味で書いたものです。

公式作品との整合性については、シナリオ展開上無視したり、都合  
のいいように変更する部分があります。

公式作品と比較して批判するなどの行為は、筆者の精神障害にもろ  
に影響し、続きを書けなくなる可能性が高い為、謹んで頂きます様  
お願い致します。

## プロローグ

パソコン不調の為、暫くの間、見づらい状態が続きます。第2話  
投稿完了まで閲覧をお待ち頂く事をお勧めします。

サイド3・ジオン共和国の首都バンチであるズムシティ（コア3  
旧ズムシティ破壊により首都機能を移転させるために新造された一  
年戦争時代とは別のコロニー）に、再び開戦の動向が見られ始める、  
少し前

第1次ネオ・ジオン戦争はネエル・アーガマ率いるエウーゴのガン  
ダム・チームの勝利によって幕が降りた。

クワトロバジーナことシャアアズナブルは行方不明、パプテマ  
スシロツコやハマーンカーンは死亡し、戦争の指導者となる人  
物が不在となったが、それは同時に、戦後の疲弊から脱出する牽引  
者が不在であるということでもあった。

ZZガンダムも、ハマーンの手で大破させられ、そのパイロットで  
あるジウドアーシタも木星に向かい、またその仲間達も、宇宙  
に平和が訪れることを信じて、それぞれの道を歩み始めた。

木星船団は、一つの任務に数年を必要とする為、地球圏で再びジオ  
ンの残党が動く気配を、彼らを感じ取る事は出来なかった。

一年戦争時代の連邦軍メンバーが参加して居たとは言え、エウーゴ  
そのものは正規軍ではなく、指導者不在の反政府活動がまともに機  
能する筈もなく、またハマーン率いるネオ・ジオン（アクシズ）の

印象が強すぎたため、小さなテロ組織の活動が報道される事も無く、彼らは平和が訪れたと信じ切っていた為、戦場に赴く事は、二度と無かった。

ここからの話は、その正規軍、つまり地球連邦軍の復活と、第2次ネオ・ジオン戦争が開始されるまでの期間。

ガンダムが、軍の先陣を切って戦うエースパイロットが搭乗する「兵器」というよりも、連邦軍の「復興の象徴」とされた頃の物語である。

アフリカ大陸西部・セネガルにあるダカールは、月面都市フォン・ブラウンを構築する天蓋の試験建設を行って以来、地球連邦政府の首都となった。

第1次ネオ・ジオン戦争時、ネオ・ジオンのダカール侵攻を阻止するため、地球に降下したエウーゴの旗艦「アーガマ」は、一時ネオ・ジオンに占拠されたダカール奪還後、アイルランド領ダブリンへのコロニー落としての阻止に失敗。

これに萎縮した連邦政府がサイド3を譲渡し、再びネオ・ジオンの拠点となったサイド3へ向かうため、ブライトⅡノアら主要乗組員が再び宇宙へ戻ったあと、アーガマは一旦エウーゴの支援組織「カラバ」に移管された。

その後、ジオンの増長に耐えかねた連邦政府は、ネオ・ジオンを共

通の敵と見なしたエウーゴ経由で、カラバに居たアムロ・レイをア  
ーガマに合流させようとした。

だが当時、既にガンダムの開発費用もままならなかったカラバで、  
リック・ディアスの陸戦型でしかないディージェしか使えなかったア  
ムロは、北米でゲリラ化していたネオ・ジオンの残党に苦戦。

結局、アーガマの主要クルーが宇宙に戻る際に合流できなかったア  
ムロは、合流直後、アーガマのクルーから、シャアの行方不明と、  
ティターンズの増長にコロニーレーザーを使わざるを得なかったこ  
と、一年戦争開戦時に悪逆を尽くしたザビ家の血を引く者が未だ存  
在し、シャアが反発してアクシズとエウーゴが同盟できなかった事  
など、グリプス戦役が長期化した事情の詳細を知る。

アムロは、地球に残ったアーガマのエースとして、第1次ネオ・ジ  
オン最後の拠点となった北アイルランドのロンドンデリーを殲滅。

6

この戦闘の際に、アムロは捕虜となったジオン兵から、第1次ネオ・  
ジオン戦争で宇宙に残っていた残存勢力である、ダンジダン・ポジ  
ドン少将の一派が、ハマーンに反発したまま、指導者を立てる機会  
を模索している事を知る。

ダブリンへのコロニー落とし成功で、弱体化した連邦政府がサイド  
3・ジオン共和国への進駐を中止してしまったため、ハマーン・カ  
ーン率いる、アクシズを拠点とするネオ・ジオンの勢力は、新たな  
拠点とすべくジオン共和国に進駐。自前の戦力を持たなかったジ  
オン共和国は、無抵抗で制圧を許した。

そのため、財力を残していたジオン共和国の穏健派であるダイクン  
派が出資して、戦争難民を収容するためのコロニー「スウィート・

ウォーター」が建造された。

だが、家系的に好戦的だったザビ家の後継者であるミネバ「ラオ」ザビは、本来の穏健な性格を無視されたまま、以前のザビ家独裁体制の復活を目論むハマーン「カーンの思想により傀儡と化し、ジオン内部でも分裂の原因となり、ネオ「ジオンは敗戦。

連邦資本のコロニー難民も收容するため、收容力に余裕があった「スウィート・ウォーター」は、地球連邦政府に接收された。

表面上は地球での戦闘は沈静化したが一、年戦争時代のジオンの残党がネオ・ジオンの手引きを行い、地の利を活かしたゲリラ的な小規模テロ活動は、断続的に続いた。

その後、接收前から財力が破綻寸前になっていた連邦政府が、スウィート・ウォーターの維持管理費を大幅に削減すると発表。

これに反対するスウィート・ウォーターの住民がデモを繰り広げ、ジオンの蜂起を望む声が高まった。

連邦政府は、これの鎮圧に手を焼き、デモ隊と連邦軍が度々衝突するようになる。

デモも鎮圧出来ない軍が有事に役に立つのかと、スペースノイドに再び連邦政府への反感と不信感が広がり始めた。

ダンジダン一派は、この機会に「スウィート・ウォーター」で同志を募り、これが再び大きな戦力を持つようになる。

あとは、カリスマ性を持った指導者を待つだけの状態になった。

アムロが、第1次ネオ・ジオン掃討のため宇宙へ上がる事を決意した直後、ハマーンは死亡。アムロは、宇宙へ戻る理由と機会を逃す結果となる。

アムロは、第1次ネオ・ジオンの真の敗戦の原因が、ネオ・ジオンの内乱に依るものだと聞き、最初は例のダンジダン一派が、手を引いたのではないかと考えた。

だが、考えてみれば、グリプス戦役時代、クワトロバジーナがダブル演説でシャアを名乗り、エウーゴの理想とした、地球環境保護のための全人類の移民は、未だに実現していない。

ネオ・ジオンを名乗る軍が急激に勢力を拡大したのは、シャアが行方不明になってからである。

ハマーンはカーンがネオ・ジオンを名乗った軍を動かした時、シャアはエウーゴとの戦力差を見て、疲弊したエウーゴではカリスマ性が無く、最早理想の実現は不可能だから、新しい戦力を欲したのではないか。

例のダンジダン一派はまだ宇宙に潜伏したままである。

今回のネオ・ジオンにシャアが参加した気配がなかったのは、ハマーンの擁立したミネバが、シャアと因縁の深いザビ家の人間であり、それに反発したからではないかと、アーガマのクルーが言っていた。

だから、ダンジダンを使い、ハマーンに疑問を持った人間を扇動して内部で分裂を起こし、自滅を待つと共に、自分が動かせる戦力の育成を待っているのではないか。

シヤアは、「スウィート・ウォーター」の騒動に乗じて、連邦軍の横暴に反旗を翻すのではないか。ハマーンに反発したという一派を率いて、自ら動くつもりなのではないか。

疲弊したエウーゴでは成し得なかった、地球の全人類を宇宙に上げ、地球の環境破壊を止めるという理想を、自らの手で実現するために。

そう踏んだアムロは、シヤアの動静を探りつつ、新しいガンダム開発のための、サンプルとなる機体を模索し始めたのである。

## プロローグ（後書き）

パソコン不調の為、暫くの間、見づらい状態が続きます。第2話  
投稿完了まで閲覧をお待ち頂く事をお勧めします。

## 第1話 ガンダムのヒント(前書き)

北米・オーガスタの、旧・ニュータイプ研究所。

ジオン出身者の不穏な動きを受け、新しいガンダムの開発のために、様々な機体をテストしているパイロットが居た。

## 第1話 ガンダムのヒント

アメリカの都市よりも、カナダのモントリオールに近い、メイン州・オーガスタの、地球連邦軍研究所。

過去に、ここでは、ティターンズを中心に、モビルスーツの地球上での運用効率を上げるため、ドダイ無しでの運用が可能な、アツシマーやギャプランをはじめとした、新型モビルスーツの開発が繰り返されていった。

元来、モビルスーツは宇宙で開発され、宇宙での戦争に用いるために造られたものなので、基本的に、常に重力という縛りのある状況が想定されていない。

このため、いわゆる陸戦用モビルスーツは、歩兵の延長線上のような運用を想定していて、空中戦は従来型の戦闘機か、ドダイと呼ばれる運搬用航空機にモビルスーツを乗せて行うという、非効率な面があった。

それを解消するために、地球の重力下で飛べれば宇宙でも運用が可能ならず、という発想のもと、アツシマーやギャプランといった、重力下での飛行を想定した機体が開発された。

だが、湾岸戦争時にF-117ナイトホーク（いわゆるステルス戦闘機の量産型）で指摘されたように、通常の航空機と異なる機能を付加させようとするとしても空力を犠牲にせざるを得ず、航空機としての飛行性能や燃料効率は絶望的で、強大な推進力で無理やり飛ばす形になるのは、致し方ない（この話は、F-22・ラプター登場前のデータを参考にしています）。

ガンダムや、後に登場するリゼルのように、ロボットがまともな航空機型に変形できるようにするのは、極めて困難なのである（筆者的には「マク ス」の「バル リー」は非常に優れた尊敬できるメカニカルデザインだと思うが本作では勿論使わない）。

だから、実際に空中戦を展開するよりは、空中から奇襲してモビルスーツに変形し、敵の反撃を受ける前に一気に殲滅して援軍が来る前にその場を離脱してしまうという、一撃離脱戦を前提とした機体が開発され、その目的通りの運用が主流になった。

もう少し具体的なイメージで言えば、マンガのように、車で背後からいきなりターゲットに体当たりして、反撃の暇もなく逃走するような感じ、と言えば少しは分かりやすくなるかも知れない。

ギャプランやハンブラビ、メッサーラをはじめとした変形可能な機体のほとんどが、強大な出力のメインバーニアを飛行形態時に後部に集中した形に変形させるのは、そうした経緯があり、それ以外の形で重力下で飛行できるように設計するのが困難だからである。

従って、ギャプランやハンブラビなども、異常と思えるような出力の大推力バーニアを搭載せざるを得ず、その機能上、凄まじい加速Gに耐えねばならないため、異常に頑丈な身体の持ち主か、精神だけでなく肉体機能も強化された所謂「強化人間」でなければ、それらのモビルスーツは使いこなせるものではなかった。

一時期カラバに参加したものの、リック・ディアスやディジェのよくな月並みな性能のモビルスーツの操縦に終始し、目立った戦果の無かったアムロ・レイは、戦友ハヤト・コバヤシの死をきっかけに、ガンダム開発プロジェクトへの参加を決意した。

アーガマの主要クルーが宇宙へ戻った後、ガンダム開発の参考にするため、北米のカラバの伝でエウーゴで運用された、ギャプランの試験運用に参加したが、3回目の今回は、降りてきた途端に、次回の搭乗を拒否した。

このギャプランは、ダカール演説でエウーゴに寝返った者が持ち込んだギャプランが、エウーゴカラーに塗り直されたものである。

「俺にはギャプランは無理だ。体がもたない」

ヘルメットを取り、赤みがかった茶色の巻き髪を何度か掻きむしり、丸顔をしかめたアムロを見て、セミロングの金髪を揺らしながら、白いブラウスに青いジーンズを身に付けた白人女性がアムロに近づいた。

「伝説のニュータイプにしては、ずいぶん弱気な発言ね」

アムロと共に、北米に戻っていたカラバの同志であるベルトーチカ  
「イルマが、悪戯っぽく笑った。」

「ニュータイプって言ったって生身の人間だ、これはいくらなんでもGが強すぎる。ガンダムはこんな操縦しづらい機体じゃなかった」  
不満をぶちまけるように、そう言ってアムロは数少ないエウーゴカラーのギャプランを見上げた。そんなアムロを挑発するように、ベルトーチカが言う。

「あのカミーユって子も、似たような感じのガンダムに乗ってたんでしょ？地球に降りて、勘が鈍ってるんじゃないの？」

「勘とか、ニュータイプとか言う以前の問題だ。ガンダムの加速Gは、ギヤプランほど極端じゃない。まともな戦闘機と同レベルだ。鬼ごっこではギヤプランには勝てないが、それ以外は圧倒的に使いやすい。ニュータイプと言っても、どんなモビルスーツでも使える訳じゃない、まともなモビルスーツでなければ、勝てるものも勝てないよ」

「折角、仲間が苦勞してくすねてきたのに、随分な言いぐさね」

「陸戦型ガンダムだって何機もあるし、同じ変形機なら、アツシマの方が安定している。そっちにしてくれればいいのに。なんでギヤプランなんだ？」

「私たちはパイロットでもなければ、設計者でもないのよ？新しい設計の方が良いと思うのが普通でしょ？」

ベルトーチカがアムロの言いぐさに、思わず声を荒らげた。その様子に溜め息をつき、アムロが頭を搔く。

「わかったよ。ただ、これで勘を取り戻せと言われても、無理だ。ギヤプランでは、俺は宇宙そらには上がれない」

「まだ振り払えないの？ララアっていうパイロットのことが」

「俺の前でララアの事は口に出すなと言った筈だ」

鬼のような形相で、アムロはベルトーチカを睨み付けた。その殺気に、思わずベルトーチカは後ずさった。

「そうやって、土足で他人の心に入ろうとする癖は、いい加減に直せ。何もかも自分の基準でものを言い過ぎると、いずれ周りに誰も居なくなるぞ。カミーユにガンダムを譲れと君が言った時に、学習しなかったのか？」

アムロは、まだ怒りが収まりきらない表情で、ベルトーチカに言った。

「そんなに簡単に振り払えるものなら、とつくの昔に振り払っているさ。それに、俺がカラバにいたのは、エウーゴにもティターンズにも、賛同できると思えるまともな主義主張が見られなかったからだ。ただ、戦わなければ死ぬような状況になって、まだエウーゴの方がましだと感じた。だが、のめり込めるほど賛同できなかったから、カラバに止まった。それだけだ」

「シャア!!アズナブルに、賛同できなかつたからではないの?」

「アウドムラで会ったときのシャアなら、手を組むことに違和感は無かつたさ。だが、彼が宇宙そらに上がってからのエウーゴは、変わってしまったと当時の俺は感じていた。コロニーレーザーを使うやり口は、ジオンの暴虐と何ら変わらないと思つたからだ」

当時の反連邦政府軍「エウーゴ」を指揮していたブレックスIIフォール准将は暗殺され、臨終の間にブレックス自らが、遺志を継ぐ事をシャアIIアズナブルに託した。

後に「ダカール演説」と呼ばれる事になる連邦議会への乱入時に、連邦軍特殊部隊「ティターンズ」の数々のスペースノイドへの暴虐を世に晒したシャアは、連邦軍兵士のエウーゴ参入を呼び掛ける。

軍による報道規制の下で真実を晒け出す報道工作が成功した直後、アウドムラと呼ばれる大型輸送機の機内で、アムロとシャアは、軍の腐敗を一掃出来る事を信じ、祝杯を交わした。

だが、一年戦争末期、ジオン公国軍のコロニーレーザー「ソーラ・レイ」により、多数の連邦軍艦隊が葬られるのを目の当たりにしたアムロには、エウーゴが「メール・シュトローム作戦」でティターンズから強奪したコロニーレーザー「グリプス2」の使用は、ジオン公国軍再来以外の何者でもなかった。

「俺は、別に戦争を扇動したい訳ではないし、ジオンやシャアの二の轍を踏む訳にはいかない。いまシャアが現れたとしたら、おそらく俺は彼に賛同することは出来ないだろう。もしコロニーレーザーをエウーゴが使わずにグリプス戦役が完全に終結していれば、俺の心境も違っていたかもしれないが、戦争にifは無いだ」

コロニーレーザーを使わざるを得なかったエウーゴの状況を、当時のアムロは知らなかった。今も、それは変わっていない。

だから、ソーラ・レイでコロニーレーザーの威力を身をもって体験しているアムロには、末期のエウーゴは、ティターンズと変わらぬい過激派に変わってしまったようにしか見えなかった。

その後、ネオ・ジオンを名乗る軍が勢力を強め、その勢いを止められなかった連邦軍が、辛うじて使える戦力を残していた、エウーゴとカラバに支援を求めた。

一年戦争時代の、独裁を目論むザビ家と同じ臭いを感じたアムロは、これに協力しようとしたが、疲弊しきった戦力に加え、もはや旧世代と化していディジェしか手駒が無かったアムロには、ネオ・ジオ

ンのダブリンへのコロニー落としては、止められなかった。

やがて、ホワイトベースの同僚であり、カラバの指揮者であったハヤト「コバヤシ」が戦死したことを知る。

アムロが、ハヤトの息子であるカツ「コバヤシ」を宇宙へ送り出す手助けをしたが、カツは戦死し、更にアムロが地球に居たにも関わらず、何も出来ないままハヤトが死んでしまったため、アムロは自分が、余りにも不甲斐なく感じられて仕方がなかった。

更に、抛り所を無くしてしまった、アムロの幼馴染みでありハヤトの妻であったフラウ「コバヤシ」が、涙が渴れるまでアムロの胸ぐらを掴み、彼を責め続けた。何故、力を貸してくれなかったのか、と手を貸せなかった訳ではなく、貸せるだけの戦力が無かっただけなのだが、アムロには何も言えなかった。フラウにとっては、どちらにしても彼が役に立たなかったことに、変わりは無かったからである。

自分がハヤトに報いるには、新しいガンダムを手に入れ、宇宙へ上がり一刻も早く戦争を完全に終わらせるしか無い。アムロは、そう感じ、焦っていた。

ハマーン「カーン」率いるネオ「ジオン」による侵攻は一旦収まったが、まだ各所で残党による小競り合いは続いている。抑止力としての連邦軍を纏めるためには、やはりガンダムというステータスが、どうしても必要なのである。

アムロは、まだシャアが生きていることや、後に第2次ネオ「ジオン」戦争を引き起こす張本人になることは、この時点では可能性はあ

ると考えていたものの、実際に動く場面までは想像出来なかった。

ダンジダン⇨ポジドンが登場を待っているという指導者⇨シャアとするのは、まだ早計だとする風潮は、この時点ではアムロをも飲み込んでいたのである。

また、アムロ自身はハマーンやシロツコとは面識が無く人伝にしか知らないため、如何にシャアが修羅場を潜っていたのか、想像もしていない。

疲弊した連邦軍やエウーゴ、そしてカラバのような地上部隊には、宇宙全体の現状の情報を仕入れられる余裕が全く無かったため、アムロにもグリプス戦役の全体像を把握出来るだけの情報が入って来なかったのである。

だから、ハマーンのネオ⇨ジオン掃討の切り札となった戦艦「ネエル・アーガマ」の建造以後、ネオ⇨ジオンでどんなモビルスーツが造られたのか、アムロは未だに知らない。

グリプス戦役末期から第一次ネオ⇨ジオン戦争への流れを知らない読者の為に簡単に纏める。

まず、グリプス戦役とは、連邦軍の内乱。エリート部隊「ティターンズ」が増長し、暴虐の限りを尽くした。これに抵抗した「エウーゴ」に、ティターンズ以外の連邦軍兵士の一部が賛同して内乱を起こしたのがグリプス戦役である。

その末期にコロニーレーザー「グリプス2」奪取後、グリプス戦役でエウーゴがティターンズに対し優位に立ったものの、両者とも戦力的には疲弊を極めていた。漁夫の利を得る形で、宇宙だけでなく

地球でも暗躍した「アクシズ軍」もとい「ハマーンが率いるネオ・ジオン」を掃討する目的で、アーガマが地球に降りた。先の「タブリンへのコロニー落とし」とは、この期間に起こった、ネオ・ジオンの連邦軍に対する威嚇である。

コロニー落としを期に、世論がネオ・ジオンを批判し、連邦軍も正式にエウーゴへの加勢を決定。大多数の地球のネオ・ジオンを駆逐する。宇宙に逃れた残党を追うアーガマのクルーは、大気圏離脱能力の無いアーガマを残し、新造艦「ネエル・アーガマ」を拠点として宇宙へ上がる。

その後新たに地球で召集されたアムロを含むアーガマのクルーは、殆どがエウーゴの支援組織「カラバ」の所属者。宇宙でしか動けない「ハマーンの乗る白いキュベレイ」の事を彼らが知らないのは、当然と言えた。

また、カラバ自体も地球でのエウーゴ支援を目的とした組織で、宇宙の情報など気にしている余裕が無いゲリラ軍に近い存在のため、カラバに居たベルトーチカも、末期のティターンズタイプがせいぜいの知識だった。

ティターンズの敗北に終わったグリプス戦役で、同時に障害ともなったのが、エウーゴで開発・運用されたモビルスーツが連邦軍制式採用となり、ティターンズ側のモビルスーツが大幅に削減されたことである。

アムロにしてみれば、重力下で安定した性能を持っており一般パイロットにも使いやすい、ティターンズが開発した「アッシュマー」(後に「アंकシャ」として発展する)は、制式採用したい。

エウーゴ側の隊長用機種「リック・ディアス」や「ディジェ（シユツルム・ディアスともいう）」は、基本的に宇宙戦向きの性能で、地上戦での自由度はアツシマーの方が明らかに高いし、使い方によつては後発の汎用機「ネモ」にも後れをとる場合がある。

また、ガンダムMk-?やそのムーバブルフレームを応用したガンダムも、根底の技術的流れは、地球連邦軍の技術を踏襲したティターンズにある。

いまティターンズの技術を完全否定するということは、新しいガンダムの設計そのものが危うくなるということなのだ。

「何とかならないものかな……」

アムロは、一通り考えを巡らせた後、ため息をついて、もう一度ギヤプランを見上げた。

「もう一機、ガンダムを造ってもらおう？」

ベルトーチカの問いに、アムロは暫く考え込んだ。

無いよりはマシだが、ティターンズに居た人間にしてみれば、ガンダムは敗北の象徴。内部の結束を逆にバラけさせる存在にならないか。それが心配なのである。

それに、アムロ自身が言うように、ガンダムでは加速力においてギヤプランにすら勝てないし、技術的な世代は、ディジェと差して変わらない。

それ以降の新しい技術で造られている、当面の敵勢力となるネオ〓

ジオンのモビルスーツが相手では、すぐに性能差が露呈してしまうだろう。

技術的な側面から言えば、戦争とはそんな黽ごつこの繰り返しの繰り返しだ。

「ガンダムでは、次にコロニー落としが実行された時に、指をくわえて見ているだけという事態を、また繰り返す事になる。次の世代を目指さないと駄目だ。だが、新しい力と言っても、何を採り入れれば良いのが、まだ掴めない。どうすれば良いのか……」

アムロが、右親指の爪を噛んだ。フラウにやめろと言われ続けているので、近くにフラウが居たときは気が張っていたのだが、考えが行き詰まるとどうしても出てしまう癖である。

「新しい力……バイオセンサーではもう古いということね？」

ベルトーチカも難しい顔になる。

「今の連邦軍には、元ティターンズの者もいる。彼らには、ガンダムの新造は悪い意味でしか影響しないだろう。ただ、性能そのものは優秀だから、ガンダムをベースに、新しいガンダムの設計にかかる方が無難だな」

アムロの言葉に、ベルトーチカが頷いた。

「性能的には参考にして、外観を似ないようにすれば良いって事ね？」

「ただ、連邦軍の再建には、ガンダムは欠かせない。しかし、ガン

ダムはスペースノイドには受けが悪い。その辺を考慮する必要がある」

「ずいぶん注文が多いわね」

ベルトーチカが顔をしかめる。

「だが、ガンダムを今の俺が動かしたところで、現時点のネオジオンでも、正直いっばいっばいだ。次の戦争でも通用するガンダムを造れなければ、いずれ連邦軍は空中分解してしまう。そうなったら、ハヤトの死やブライト達の苦勞が、水の泡だ」

「出来るだけ採り入れるには言っておくけど、あまり期待は出来ないわね」

「頼む」

アムロは、それだけ言って、疲れたから休むと言い残し、官舎に戻っていった。

「なんだか、ギャプランはお気に召さなかったようですね」

聞き覚えのある声に、ベルトーチカが振り向き、申し訳無さそうに苦笑した。

「ごめんなさい、レイジー」

青いつナギの作業服を着た青年、レイジーハウアーが、軽く頭を掻いた。身長も遺伝子もベルトーチカとほぼ同じ、金色の短髪・碧眼の典型的な白人である。童顔の丸顔で、実際には年上の、顎の細

いベルトーチカよりも若く見える。

「結構、持ってくるのに苦労したんだけどなあ……」

「推進力が大きすぎて、アムロでも、もて余すらしいのよ。新しければ良いってもものでも無いみたい」

「わかりました。また出物があれば、持ってきます」

レイジーも、元はベルトーチカと同じように、エウーゴの支援組織であるカラバの一員であった。

20歳でカラバに参加したが、現在はその修理技術を買われて、モビルスーツの製造元であるアナハイム「エレクトロニクスで、23歳の若さでオーバーホール部門の主任を担当している。

「そういえば、この前の主任会議の時に、変わった機体のことを聞いたな。あれはどうだろう?」

「変わった機体?」

「ええ。確か「キュベレイ」って言ったと思います。この前のネオ「ジオン戦争でネオ「ジオン軍が使ってた、量産されてた機体なんですがね。ニュータイプ、強化人間って言うんですか?そういうパイロットしか使えない機体のサンプルが、フォン「ブラウン本社に入ったと」

ベルトーチカの目付きが変わった。

「ニュータイプ専用機が、量産されてたっていうこと?ニュータイ

プって、そこらにいるパイロットとは違うのよ？」

「僕も詳しくは知りませんが、回収業者が変わったデザインの装甲を次々に拾ったと連邦軍に連絡してきたので、現地で連邦軍と、うち（アナハイム）が協力して、先の戦争で撃墜された機体の残骸を集めて、復元したそうです。残骸が一ヶ所に集中して散乱していたので、回収して組んでみたら、1年戦争時代の「エルメス」に似た、遠隔操作のための機能がついていたとか」

「エルメス……」

聞き覚えのある機体名、しかしアムロに怒られた記憶しかないその単語に、ベルトーチカが顔をしかめた。

「何か？」

レイジーが怪訝そうに、ベルトーチカの顔を覗き込んだ。本人は無意識だったのだが、余程不快そうな顔をしていたのだろう。レイジーの声に我に帰ったベルトーチカが、作り笑いをした。

「うっん、なんでもないわ。また参考になりそうなものが手に入ったら、教えてもらえるかしら」

「例のキュベレイの遠隔操作システムの研究が、始まるかもしれません。あれをガンダムに付けられたら、凄い抑止力になりますからね」

この頃、まだガンダムは開発すらされておらず、連邦軍にも無人遠隔操作砲撃システム「ファンネル」を運用する技術は、まだ無い。

「わかったわ。アムロも、新しいガンダムは必要だって言ってる。ただ、その条件が細かいと言うか、注文が多くて……」

ベルトーチカの話聞き、レイジーが苦笑した。

「ガンダムっぽくないガンダムねえ……。出来なくもないでしょうから、一応会議には掛けてみますよ」

「今回ばかりは、あまり期待せずに待ってるわ」

互いにもう一度苦笑して、レイジーは職場に引き揚げていった。

「どうしても、「エルメスのラレア」が出てくるのね」

ベルトーチカが、溜め息をついた。

「ジオンか……。そういえば、もうすぐジオン10周年の建国祭があるって言ってたな。スウィートウォーターのデモの直後なのに、大丈夫なのかしら」

もう一度溜め息をついたベルトーチカの不安は、後に的中することになる。

## 第1話 ガンダムのヒント（後書き）

ベルトーチカの言うジオン共和国建国10周年とは、宇宙世紀0080年の一年戦争終結により、ジオン公国が解散、直後に共和国が設立されたという設定で、この話の独自設定です。公式設定のジオン共和国設立が何年なのかは、調べていません。ご了承ください。

## 第2話 建国祭で（前書き）

ジオン共和国建国10周年記念イベント。

その会場で、少年はあることに気付く。

「ジオンのモビルスーツしか、無い……」

## 第2話 建国祭で

サイド3・ジオン共和国は、一年戦争の終結後、旧ジオン公国が解体され、地球連邦政府の者が共和国政府高官に入る事と、連邦軍の進駐を受け入れる条件で新体制が発足し、10年を迎える。

途中、ミネバ・ラオ・ザビを擁立して、ネオ・ジオンを騙ったハマーン・カーン率いるアクシズに進駐を許したが、その後のハマーン一派の撤退で、共和国体制に無事戻った。

この日、サイド3の全てのコロニーが、ジオン共和国の建国10周年記念イベントでお祭り騒ぎになっていた。

サイド3・コロニー「フェニックス」のジオン共和国10周年記念イベントの会場。

トウマ・ナギツジは、お目当てのモビルスーツが展示されているという、中央広場へと急いだ。2cmも無い短い黒髪が立った、やや細めの顔、身長170cm程の、典型的な日本人の容姿。青のチェック柄の綿シャツに濃紺のパーカー、ジーンズと、至って普通の高校生である。

「フェニックス」の中央広場は、広場というよりは、10階建ての官公庁の官舎に囲まれた、広場というよりは中庭に近い構造で、50m四方程度の広さ。モビルスーツを展示と言っても、8機程しか並ばない。

それでも、高校生のトウマにとっては、珍しいものである事には変わりがない。機種は当日のお楽しみ、ということと伏せられていた

ため、余計にトウマは浮かれていた。

だが、人混みを掻き分けるようにして、実際に広場に入り、会場を一瞥したトウマは、あることに気付いた。

「ジオンのモビルスーツしか無い」

「ジオン共和国主催のイベントなんだから、当たり前でしょう？」

トウマと一緒に来た、同い年で幼馴染みのルナ「アキモトが、呆れたように言った。ショートボブの細い黒髪に丸顔、つぶらな瞳と女の子らしい身体的な特徴以外は、トウマと雰囲気は変わらない。服装の好みも似たようなものである。

「ガンダム系統は、第1次ネオ「ジオン戦争が終わるまでに全て大破しているから、現存しないのはわかる。けど、共和国の立場を考えれば、ジム系統くらいは並べるべきじゃないか？ 駐留軍は何も言わなかったのかな？」

「そんな細かい事を気にしていたら、楽しめないわよ。ほら、行きましよ」

ルナが、トウマの袖を引いた。何しろ、コロニー内で祭りの類など滅多に無い。ルナの声だけでなく、表情も弾んでいるのも、無理も無い事といえた。

「わかったよ、袖が伸びるから、引っ張るな」

そう言いつつ、トウマは、やはり気になっていた。

” ザクは分からないではないが、ゲルググやリック・ドムまで……  
しかも、あのザクやゲルググ、なんで赤いんだ？”

ザクは頭部の角こそ無い坊主頭だが、まるで「赤い彗星」を彷彿とさせる、フェラーリレッドのような、深みのある真紅。ゲルググも、同じ色である。

実戦に持ち出されたならこれほど綺麗な筈はないから、最近塗装されたリバイバルカラーなのだろう。

会場の奥に進むと、最近残骸が見つかって復元されたという、リック・ディアスやキュベレイMk-?が並んでいるが、やはり赤い色をしている。

” まるで、赤い彗星を褒め称えるような並べ方だな。関係ないキュベレイまで、赤い色なんて……”

トウマは、口にこそ出さなかったが、今にも「ジーク・ジオン」の斉唱が聞こえそうな会場の雰囲気、一抹の不安を覚えていた。

「なんか、赤い色のやつが多いね」

モビルスーツに殆ど興味の無いルナも、さすがに気になっていたようだ。

「基本的に、ジオンにとって赤は連邦の「白い悪魔」に唯一対抗してきた、「赤い彗星」の象徴だ。だから、ジオン出身者には、神格化して崇める人もいる。エウーゴで彼がリック・ディアスを赤い色に塗った後、威圧感が出て敵が怯むってんで、殆どのリック・ディアスが赤くなった。黒い時代を知っている人の方が少ないんじゃない

か？」

トウマは、とりあえず知っている知識をルナに教えた。彼の通う工業高校ではモビルスーツの整備も実習にあり、歴史の授業でも関連する史実は習う。ちなみにルナは、トウマにモビルスーツに関わる事を反対され、いわゆる普通科高校に通っている。

「赤いやつは、全部その「赤い彗星」、確かシャアって言ったっけ？その人一人が乗ってたって事なの？」

「あの「キュベレイMk-1」だけは、彼が行方不明になった後のものだ。他の赤い機体は乗ったことがあるらしいね」

トウマは、比較的武骨な装甲ばかりのモビルスーツの中で異彩を放っている、曲面が美しい優美な装甲を纏った機体を指差しながら言った。

「なんで関係ない機体まで赤いんだろう？」

「ネオ・ジオンの内乱があった時に、識別のために赤く塗られたんだって。あまり深い意味は無かったんだろうけど、結果としてジオンっぽく見えるって事だったんじゃないかな？」

確かに、兵士の意味を統一して士気を上げるのに、機体の色を揃えるのは、効果が大きい。エウーゴの主力機種であった「リック・ディアス」が宇宙戦において大きくエウーゴに貢献したのも、赤い機体が増えた後の事である。

また、新型機が続々と増え、機種毎にカラーリングの違ったティターンズの士気が統一感に欠けたのに対し、リック・ディアスやネモ

しか量産できなかったエウーゴの方が比較的足並みが揃っていたのも、このような要素があったからである、という部分は否定できない。

説明を終えて、何気なく正面に目を向けたトウマは、少し先の人混みの中に、見覚えの有る顔を見掛けた。

「あれは……!?!」

反射的に彼は駆け出して、視線の先の人物を追った。だが、祭りの中の人混みをかき分けて誰かを追うなど出来る訳もなく、彼の尋ね人の姿は視界から消えた。

「ちょっと、いきなり走らないでよ!はぐれちゃうじゃない!」

肩で息をしながら漸く追いつき、トウマに抗議するルナ。だが、トウマの耳には、そんなルナの言葉は、届いていなかった。

「一体、なぜ……こんな所に……!?!」

一点を見つめたまま、トウマは呟いた。目を見開いたままの、トウマのただ事でない様子に気付いたルナは、トウマの顔を見て尋ねた。

「どうしたの?知り合いでも居たの?」

ルナの声で我に帰ったトウマは、ルナに謝った。

「ごめん。知り合いかと思ったんだけど、人違いだったみたいだ」

そう言うてはいるが、明らかにトウマの表情には戸惑いの気配が感

じられた。心配になったルナが、念を押す。

「大丈夫なの？」

「少し気分が悪くなってきた。今日は帰るよ」

「わかった。ここからじゃ地下鉄乗り場も遠いから、タクシー拾ってくる。そこのベンチで座って待ってて」

そう言って、ルナは大通りの方へ向かった。

トウマは近くのベンチに座り込み、先ほどの顔を思い出していた。

「シンヤ兄さん……」

トウマは、グリプス戦役で戻って来なかった、戦死した筈の兄の名を口にした。だが、それを自分自身で否定し、何度も頭を振った。

「……そんな筈は無いよな。戻って来て無いんだから、生きてる筈が無い。やっぱり、疲れてるのが、俺は……」

そこまで言い終わった直後、ルナが呼んだタクシーが、トウマを迎えに来た。

「大丈夫？顔が真っ青だよ？病院へ言った方が」

「そうだな、頼むよ」

ルナの言葉を遮るように、トウマは言った。

トウマは、ルナに付き添われ、フェニックス中央病院に行き、診察を受けた。予約しなくてもこのような大規模病院の診察を受けられるのは、このコロニーや病院が、連邦政府出資であることと、トウマの父と（亡くなった筈の）兄が、連邦軍のジオン駐留軍の軍人だからである。

熱も出ていたから、ということでも一般的な風邪薬を出され、とりあえず自宅に戻り、休む事にした。

「ルナ、今日はごめんね、送ってくれてありがとう」

熱のせいも、声も掠れているトウマは、ルナに支えられるようにして自宅の自分の部屋に戻り、ベッドでルナに謝った。

「一人じゃ作るのは無理でしょうから、お粥を作ってくる。ちゃんと食べてから薬を飲まないよ、治らないよ」

優しくトウマの額を撫でて、ルナは微笑んだ。トウマは、声を出して返事をする余裕も無く、黙って頷いた。

トウマの父は軍人、母は軍病院の看護師。だから、宿泊勤務が基本で、殆ど家には居ない。兄も、グリプス戦役でエウーゴに参加し、戻っては来なかった。

ルナは、トウマが地球に居た時の2軒先のご近所の娘で、ずっと兄弟のように過ごしてきた。お互いに、風邪をひいたと聞いては見舞

いに行き、看病をしてきた仲である。

一年戦争後、連邦軍のサイド3進駐に伴い、やはり軍人だったルナとトウマの父親達が、揃って進駐軍に編入されたため、現在までご近所同士の付き合いが続いていた。

手慣れた様子で、ルナは白粥を用意していたが、トウマの様子が急変したことが気になり、その時の事を思い返していた。

”トウマが急に走って行った後から、様子がおかしかった。トウマが、いま会ったら態度が変わりそうな人って……誰だろう？シンヤ君は戦死した筈だし……”

やはりルナも、トウマの兄・シンヤの名前を思い浮かべた。トウマとルナは同じ歳、シンヤも年齢は2つしか変わらないから、ルナはシンヤの事はシンヤ君と呼んでいた。

鍋の蓋が音をたて始めたのに気付いて我に帰ったルナは、トウマにお粥を運び、薬を飲ませた後、トウマの看病のため、氷などの準備を始めた。

”そう言えば、兄さんはカイ＝シデンというジャーナリストに似てると、しょっちゅう言われてたな……。ということは、あれは兄さんではなくて、そのカイ＝シデンというジャーナリストだったのかもしれない”

薬を飲んだ後、少し落ち着いたらトウマは、白いリネン地のスーツを着た、自分が追おうとした人物の背格好を思い出していた。

氷枕と、冷却シートを持って来たルナが、トウマの思い詰めた表情

に気付いた。

「熱があるときくらい、何も考えないようにしないと、知恵熱が出ちゃうよ？それに、ちゃんと頭が回転してない時に考えた事なんて行動した時ろくな事にならないんだから、とりあえず休んだ方がいいよ」

氷枕をベッドに置き、トウマの額に冷却シートを貼りながら諭すように言うルナに、トウマは礼を言った後、小さな声だが真剣な表情で言った。

「ルナ、俺が回復するまで、暫くカイシデンっていうジャーナリストが何か新しい記事を発表してないか、注意しておいてくれな  
いか？」

ルナは、トウマの真剣な表情に、怪訝そうな表情で訊き返した。

「その人って、確か一年戦争でホワイトベースに乗ってたって人だよ  
ね？そういえばシンヤ君が、よく似てるっていつも言われてた……」

「俺が昼間見たのは、兄さんではなくて、その人かもしれないんだ。  
軍事ジャーナリストが此処に居たということは、近いうちに何かある  
と感じているのかもしれない」

「近いうちに何かって……戦争になるかもしれないってこと？」

「サイド1の、スウィートウォーターの割譲の件で、連邦政府とジオン  
共和国は未だにぎすぎすしてるからね。この前も、連邦政府が  
スウィートウォーターの管理費を大幅に削るって言って、ジオン

出身者がデモをしてただろ？あれを口実にすれば、宣戦布告には十分だ」

「思い過ごしじゃない？」

「取り越し苦労で済んだら良いんだけどね……。とりあえず、1日に1回で良い。ネット上の情報を調べておいて欲しい」

「わかった。後は私に任せて、ゆっくり寝た方がいいよ」

いい加減に話を切らないと、トウマが眠りそうにないと感じたルナは、トウマを眠らせるため、もう一度諭すようにトウマに言った。

ルナが頷いたのを見て安心したのか、トウマは小さく頷き、目を閉じた。

”今更、また戦争になるなんて、思いたくないけど……。確かに、この前のデモを境に、世の中がぎすぎすしてるし、いつ戦争になっても不思議じゃない空気であることは、確かなんだよね……”

ルナは、トウマの寝顔を見ながら、複雑な思いにとらわれていた。

## 第2話 建国祭で（後書き）

ここからは、月1回更新出来るかどうかという超スローペースになります。次回更新まで暫くお待ち下さい。

### 第3話 予兆（前書き）

トウマに頼まれていた記事の検索中に、件のカイシデンの記事が、ルナの目に留まった。

それは、先日のスイートウォーターのデモに関するものだった。

だが、ジオン出身者の立場がいかに悪いかを伝える、戦争もやむなしと言つ霧囲気を、暗に感じる内容であった

### 第3話 予兆

”地球の出身者にも、私たちがみたいにはジオン共和国に住んでいる人間だって居るんだから、もっと連邦政府も考えてくれないと……戦争が始まったら私達だって、とばっちりじゃ済まなくなる……”

ルナは、戦争が始まった後、自分達地球出身者が、旧日本軍の”非国民”に対する刑罰のように、リンチでも受けるのではないかと想像したとたん、そのおぞましさに身震いした。

とはいえ、二人の父は両方とも連邦軍のジオン駐留艦隊所属の軍人。簡単にこの土地を離れる訳にはいかない。

地球出身といえど、増えすぎた地球の人口を減らすための宇宙移民だったのだから、地球に再度戻ることは、地球でなければ治すことのできない病気でもない限り、認められていないのだ。

”サイド3は、旧ジオン支持者も多いから、本当に戦争になったら、ここも荒廃するだろうな……”

ルナ達の住むサイド3・ジオン共和国のコロニー「フェニックス」は、旧ジオン公国の敗戦後、講和条約の条件であった、地球連邦軍の駐留軍の所属者が居住するためのコロニーとして、連邦政府資本で建造されたコロニーである。

他のサイド3内のコロニーと異なり、1年戦争の後に建造され、年式は新しいが、外敵に対する警戒心が薄い時期の構造であり、また居住が主目的で他のサイド3の工業コロニーと違い産業スパイを警戒する必要も無いので、セキュリティに関して、やはり甘い考

え方が蔓延している。

実際に戦争が始まれば、サイド3の他のコロニーと異なり、コロニー内に籠城することなど、ほぼ不可能。一般住民、すなわち民間人は、駐留軍が守ってくれることに期待するしかないのである。

嫌な想像しか出来なくなったルナは、不安を掻き消そうと、双方向通信のテレビの電源を切り、トウマの部屋に戻った。

「大丈夫だよな？戦争になったりなんか、しないよね？」

まだ血の気が戻らない顔で眠ったまま、返事をしないトウマの手をそっと握り、ルナはそう呟いて、その温かさがずっと続くように祈った。

だが、この祈りは、聞き届けられることは、無かった。

その3日後の朝、宿泊勤務から戻ったルナの父・ユウキは、朝食を終えた直後、ルナがテーブルから離れる前に、切り出した。

「トウマのお父さんも行くんでしょ？」

当然のような顔で、ルナが言った。だが、ユウキの表情が曇った。

「トウマのお父さん……コウイチは、月のフォン＝ブラウンに移る。今回は別々の場所に異動になった」

自分の親友であり幼馴染みであるトウマの父・コウイチ「ナギツジと離れる辛さも有ったが、それ以上に、ルナがトウマの側に居たいという気持ちを知っていたユウキの声は、暗く沈んだものだった。

ルナの動きが、片付けようとした空の皿を見つめたまま、時間が止まったように硬直した。ルナだけではない。家全体の時間が、止まった。

その後、どのくらい時間が経ったのだろうか。ようやくルナが言葉を発した。その第一声は

「……嘘」

まだ目を見開いたまま、視線を動かすことが出来ないルナの目は、焦点が合っていない。

ユウキが、目を閉じ、テーブルに肘をついて組んだ手に、額を乗せた。

「すまん、ルナ。二人とも、家族に良かれと思って昇進試験を受けたんだが……こんな事になるのなら、受けなければ良かった」

ユウキが言い終わったとき、玄関の呼び鈴が鳴った。時間から見てトウマに間違いないだろう。ルナの体が、びくっと跳ね上がるように反応する。

ユウキがルナを見て、ルナがユウキの目をちらりと見たあと、ルナがゆらりと立ち上がった。その顔は、まるで幽霊のように、生気が全くと言っていい程、感じられない。

壁に手をつき、足元がおぼつかないままふらつきながら、ルナは玄関に向かった。

「どうしたんだろ？いつもは、鳴らしたらすぐ出てくるのに」

トウマが首を傾げ、もう一度呼び鈴を鳴らそうと手を掛けた時、ドアが開いた。

「おはようルナ、今日は遅かった」

生気の無い、焦点の合わない目をしたルナの表情を見たトウマの口が、言葉を失った。

「どうしたのルナ！？何があったの！？」

慌ててトウマが、抱き止めるようにルナを支える。その温かさを全身で感じ、ルナの体が涙に震えだした。

「ルナ！？何があった！？何で泣いてるんだ！？」

強盗に襲われでもしたのかと、トウマの口調が強くなる。その直後、半開きのドアの向こうから、やはり生気の無いユウキが、顔を出したのが見えた。

「おじさん、一体何があったの！？何でおじさんが居るのに、ルナが泣いてるの！？」

「トウマ君……コウイチから、何も聞いてないのか」

「父さんから……！？昨夜の哨戒勤務から、まだ戻ってないから、何も聞いてないけど……？」

状況がまだ理解できないトウマの声から、怒気が薄れていく。父の名が出たということは、軍が絡んでいるのだと察しがついたからである。

ルナが声をあげて泣き出した。登校は無理だと判断したトウマは、ルナを支えながら、とりあえず玄関へ入った。

落ち着くまで泣かせた方が良く考えたトウマは、玄関で立ったままルナが泣き止むのを待つことにした。

自分を力一杯抱きしめ、出せるだけの声をあげて泣きじゃくるルナの背中を無言で撫でながら、トウマは、ルナとユウキを交互に見ることしかできなかった。

泣き疲れて、膝に力が入らなくなったルナを、自室のベッドに寝かせ、ユウキの話の聞こえと部屋を出ようとしたトウマが、ルナに力なく手を握られ、動けなくなった。

「一体、何があったの？」

ルナ自身は無事であると察し、優しい静かな口調でトウマが尋ねた。わずかに、トウマの手を握るルナの手に力が入ったが、疲れきったルナの口から言葉が出ることは無かった。トウマは優しくルナの手を握り返し、ルナを落ち着かせようと、何度か額をそっと撫でた。

下に降りてこないと判断したユウキは、ダイニングの椅子に座り、

トウマが降りてくるのを待つことにした。

握ったままのルナの手の力が緩んだのを感じて、ルナが目を覚まさないのを確かめた後、トウマはそっと部屋を出て、ダイニングに居るユウキの元へ向かった。

「一体、何があったの？あんなルナの顔、初めて見た」

トウマは、やはり生気の無い顔をしているユウキに尋ねた。

「俺とコウイチの転勤が決まった。俺はロンデニオンの新設部隊、コウイチはフォン＝ブラウンでテストパイロットになる」

搾り出すようなユウキの声を聞き、トウマも、やはり時間が止まったように、表情が固まった。

「同時に大尉に上がれば、同じ部隊に異動になると思ったんだが、ジオン出身者の間で不穏な動きがあるからと、軍が動き出した。コウイチが、ロンデニオンの新設部隊「 Rond・ベル」に配属される。モビルスーツのテストを、フォン＝ブラウンのアナハイムで担当して、俺たちはそれを使ってスウィート＝ウォーターの警戒にあたる。俺たちが昇進試験なんか受けたばかりに、2人にも辛い思いをさせることになってしまった。本当にすまない」

ユウキが頭を下げた様子を見て、我に帰ったトウマの口から、自然に口をついて言葉が出た。

「新しいモビルスーツって、まさか「ガンダム」なの？」

「ガンダム」とは、エースパイロットに与えられる、特殊な機体の

総称。ガンダムが新たに製造されるということは、戦争が近いと見込まれているということである。

「今回は量産機「ジム」の改良型だ。だが、状況によってはガンダムの開発も、無い訳では無いと思う。だから、ルナを、ここで……サイド3で一人にする訳にはいかない。そもそも、サイド3自体がジオンの本拠地だし、フォン・ブラウンもサイド3に近いから、戦火に巻き込まれる恐れがある。万一戦争になったら、何かあるかわからない。サイド1のロンデニオンに居る方が安全だから、ルナは連れて行く。それがルナのためだ」

「俺は、どうしたらいいの？どうしたら、ずっとルナと一緒に居られるの？」

焦点の合わない目で、トウマは呟いた。その様子に胸が締め付けられる思いがしたが、答えの見つからないユウキには、何も言えなかった。

開いてテーブルに置かれていたトウマの手が次第に握られ、拳が震えだす。

答えが帰ってこない苛立ちに、トウマは音を立ててテーブルに拳を叩きつけた。

「すまん……トウマ君」

跳ねるように立ち上がり、トウマはそのままルナの家を飛び出した。

「トウマ君……」

ユウキが叫んだが、後を追うことは、出来なかった。

「何て無力なんだ、俺は……自分の娘の幸せすら守れないのに、何が宇宙の平和だよ……！！！」

自分の無力感にさいなまれたユウキは、その場で跪くように膝を突き、拳を床に叩きつけた。

ショックで何も考えられなくなり、無我夢中で走り続けたトウマは、いつの間にかコロニー端部の、ジオン出身者が多い区画の繁華街に迷い込んでいた。

いくら部活の空手で鍛えていても、6 km近い距離を全力で走れば、流石に疲れる。トウマは、喉の乾きを覚え、肩で息をしながら周囲を見回し、近くにあった喫茶店に入った。

コロニーでは珍しい、ニス塗りの淡い茶色の調度品と、素材の濃い茶色を活かした内装の、渋い雰囲気の冷房が効いた店内に入ると、モーニングセットのコーヒーの匂いに混じって、宿泊勤務明けの軍人と見える数人が、酒を飲んでいるのが目に入った。

”その場の勢いとはいえ、結局、学校サボってしまったな”

気分が落ち着いたトウマは、改めて自分が高校の授業をサボった事を思い出した。だが、今更学校に行く気にもなれず、とりあえずミックスサンドとオレンジジュースのモーニングセットを口に入れて、

ユウキが言っていた事を頭の中で反芻し始めた。

”ルナの家族がロンデニオンで、うちの家族がフォン・ブラウンか……。こんな別れ方でルナと会えなくなるなんて、思っても見なかった……”

トウマも軍人の息子である。いつ異動がかかっても、受け入れられる覚悟はしているつもりだった。

だが、これまでは、ずっとルナと一緒に居たから、寂しさなど感じなかったし、誰とでもすぐに仲良くなるルナが居たから、内向的なトウマでも、友達がすぐにできた。そんなトウマが、ルナと離れて生活していく事など、考える筈も無かった。

”ルナと離れたくない。ずっと一緒に居たい。そうだ、父さんに、俺がロンデニオンへ行けるように、頼んでみよう。多分、それが一番いい。みんなが安心できる筈だ”

皿を空にしてオレンジジュースを飲み干し、トウマが席を立とうとした時、どこかで聞き覚えのある声が耳に入った。肉声ではなく、スピーカーを通したような、若干ノイズ混じりではあるが、3年前、グリプス戦役中にダカールの連邦政府議会で、通信施設を占拠し、テイターンスの暴挙を明るみに晒した人物の声に、よく似ていた。

”この声は……確か、シャア・アズナブル……！？”

トウマ自身も、間もなく18歳。宇宙世紀0072年の生まれだから、一年戦争時代には既に小学生だった。

当時、父のコウイチや、ルナの父・ユウキは、ティターンズのオーガスタ基地に所属し、アツシマー隊小隊長を務めていた。その家族は、戦火に晒されないよう中立のサイド6に疎開していた。そのため、トウマたちは自分が住んでいるコロニーが戦火に巻き込まれた経験は無いが、当時まだダカール演説の意味をきちんと理解できなかったトウマは、それ故にこの声が印象に残っていた。

” グリップス戦役以来、行方不明になっていた筈のシャアが、今になって何をしようというんだ？ ”

耳をそばだてて、トウマはその声が訴える内容を聞き取るうとした。だが、声が小さく、内容までは聞き取れない。近づいても怪しまれるだけなので、迂闊に近づくわけにもいかない。

” くそっ……もう少して内容をちゃんと聞き取れるのに……！ ”

トウマがそう思った瞬間、ある演説中継で、トウマがその異様さ故に畏怖した記憶がある、今頃になって決して聞こえては来ない筈のある言葉が聞こえた。

連邦軍関係者なら、誰もが耳を疑ったことだろう。

確か、ギレン＝ザビという名前の人物が発した言葉だったと、トウマが思い出した。小さい声だったが、確かに聞こえたのだ。

「ジーク・ジオン（ジオンに栄光あれ）……！」

トウマは、耳を疑った。目を見開き、時間が止まったように固まったのは、今日2度目だった。

#### 第4話 ジオンの鼓動（前書き）

今になって聞こえる筈のない、”ジーク・ジオン”の斉唱。

たまらずトウマは、やめろと叫び声をあげる。

取り囲まれたトウマを救ったのは

## 第4話 ジオンの鼓動

「ジーク・ジオン……」

ノイズだらけのシャアと思われる声が発した言葉に呼応するように、その場に居た誰かが、呟いた。それが引き金になり、場の雰囲気が変わる。

ジーク・ジオン！ジーク・ジオン……！！

誰かが呟いた言葉が、波紋が広がるように、広がっていく。やがて、さざ波のような静かな広がりを終えると、台風前の波のように次第に音量が上がっていく。最後には、怒濤の叫び声に変わっていった。

ジーク・ジオン！！ジーク・ジオン……！！！！

「やめるおおおっ……！！！！」

耐えきれなくなったトウマが、堪らず出せる限りの大きさで、叫び声をあげた。その声に、水を打ったように静まり返る男たち。そして、一斉にトウマの方を振り向く。

「何がジオンだ……！何が同志だよ……！！あんたら大人は、自分で戦える。自分の意思を貫き通しても、自分の力で生きていける。だがなあ、俺たち子供はどうすりや良いんだ！？俺はまだ良い、女の子や、俺なんかよりずっと小さな子供だって、何十万人と巻き込まれるんだぞ！！あんたらのつまんねえプライドで死んでいく子供の事を、何で考えられないんだよ！？あんたらだって、1年戦争で散々苦しんだんじゃないのかよ！？あんたらが子供の時、1年戦争

やってる奴等の事、どう思ったんだ！？何で、自分達の手で同じ過ちを繰り返そうとするんだよ……！！大人がそんなんだから、子供が苦労するんだろっが！！！！」

出せるだけの声で、心の中から溢れてきた言葉を出てきたままに、息継ぎも忘れてマシンガンのように一気に放出したトウマは、まるで全力疾走でもしたかのように、両膝に両手を突いて、大きく肩で息をしていた。

周囲の男たちの雰囲気、祖国を侮辱された怒りで、殺気立っている。普段ならガキの戯れ言だと受け流せたのだから、盛り上がり最高潮に達し、長年の鬱屈を晴らしている最中に、腰を折られたのだ。そう簡単には勢いは抑えられない。

”まずいな”

片隅でスコッチを煽っていた、白いリネン地のスーツを着た男が立ち上がり、トウマの前に立った。

「ガキの戯れ言だ、ここは穩便に済ませようぜ」

男は別段トウマを庇うような風情を見せるでもなく、悠然と立っていた。

その様子に、トウマを取り囲んだ男たちが、掴みかからんとしていた勢いを挫かれ、一旦立ち止まった。

「てめえも地球至上主義者か？」

190cm近い、明らかに元軍人と思われる威つい体格の男が、怒

気と殺気の混じった低い声で、白スーツの男を威圧する。

「こんな所でリンチなんてやらかして、お宅らが当局のガサ入れ受けたら、今までの我慢と苦勞が水の泡だぜ？やるべき時期ってモンを見極める必要は、あるんじゃないのかい？」

怯む風でもなく、むしろ冷静な目つきで、白スーツの男が受け流す。

「てめえ、何者だ？」

「通りすがりのただの酔っぱらいさ。ホレ、行くぞ」

トウマを促し、男は、騒ぎの迷惑料だ、釣りは要らないと店員に言い、トウマの分も含めた額の札をカウンターに置き、その場を立ち去った。

下を向いて肩で息をしながら、更に背中を押されて店を出る形になったトウマは、白スーツの男の顔も見ず、礼は言いませんよ、と強がりを言った。

「かまわんよ。だが坊主、時と場所を選んで正義感を振り回さねえと、いくらお前さんが正しいって、生きて帰れねえぞ。どんな素晴らしい思想を持ってたって、生きてなけりゃ実現は出来ねえんだ。少しは空気を読むっても、大人になるには必要だぜ」

知ったような事をさらっと言っただけの男に、トウマは思わず激昂した。

「あなたに何が分かるってんだ！？あんな奴等のために、何で俺たちが巻き込まれなきゃならないんだよ！！こんな世の中じゃなければ

ば、ルナはサイド1になんか行かずに済んだのに……！！ずっと一緒に居られた筈なのに……！！なんで……俺達が……」

ルナがもう傍に居なくなるという悲しみと寂しさが、トウマを幾度と無く暴走させ、その度に声と拳が涙に震える。膝から力が抜け、ひざまづくような格好で、トウマが泣き崩れた。

「ちょっと待て、いまサイド1に誰かが行くような事を言ったよな？ サイド1は今、軍か報道関係以外に入るとは禁止されてる筈だ。お前、連邦軍が動いてる事を知ってるのか？」

片膝を立ててしゃがみ、トウマの背中に右手を置いて男が尋ねた。

「あいつらのせいで、ルナのおじさんがサイド1に転勤になって、俺達が会えなくなるんだ！ 知らないわけ無いだろう！！」

トウマは、ありったけの声で怒鳴り、男を睨み付けた。その顔をみた瞬間、トウマの表情が固まった。

「……兄さん？」

「俺に兄弟は居ない。人違いだろ」

「もしかして、あなたはカイシデンさん？」

「そうだ」

男は特に感情もない表情で、淡々と答えた。

「それよりも、場所を変えて話を聞きたい。まだ時間はあるか？」

「……はい」

「少し歩くぞ」

カイは、トウマを立たせた後、5分程歩き、地球のスターバックスやドトールにも似た雰囲気の、別の喫茶店に入った。カフェオレを2人分トレーに載せたカイの誘導で、隅の方の角地の席で、2人は向かい合った。

「お前がさっき言ってたルナっていうのは、女か？」

トウマは黙って頷いた。

「幼馴染みの子です。二人とも、言葉も話せない頃からずっと一緒に居ました。どっちも連邦軍の軍人の子で、地球からサイド3に駐留が決まった時も、一緒に引っ越して来たんです」

「それが、今回は一緒に移動する事にはならなかった訳だ」

「ルナのお父さんが、ロンド・ベル隊という新設の部隊に異動になったそうです。サイド1のスイートウォーターの警戒にあたる部隊です」

「ロンド・ベルだと!?!」

さすがに声は小さかったが、カイは驚きを隠しきれなかった。

「やはり、ジオンが戦争の準備をしてるのを察知して、連邦軍が動いてるってのは、本当のようだな」

「なぜカイさんは、ロンド・ベルを知ってるんです？」

トウマが、怪訝そうな表情で尋ねた。カイはプロの軍事ジャーナリスト、情報こそ飯の種だから、知っていて当然である訳だが、普通の高校生のトウマからすれば、不思議でならなかったのである。その質問に、カイは声を潜めてトウマに聞き返した。

「アムロ＝レイというパイロットを知っているか？」

「この世に知らない人は居ないって位の、有名人じゃないですか」  
何を今更という表情のトウマに、カイが真剣な顔を見せた。

「奴が今回の戦争に備えて、ロンド・ベルに呼ばれてガンダムの開発に入ってるって噂がある。何か知らないか？」

トウマの表情が、険しくなった。

「ガンダム？また作るんですか？」

「何も聞いてないようだな」

トウマは黙って頷いた。

「ルナなら、もう少し位はわかるかもしれませんが、ガンダムの開発はトップシークレットの筈ですから、いくら息子や娘といえど、言えない筈ですけど」

「そのルナという娘に会って、話を聞いてみたい。写真が有れば、

見せてくれないか？」

「生憎、あまりにも身近過ぎて、写真の類は撮っていませんでしたし、行き先も軍の家族住宅だから、部外者には話せないんです。教えると、俺だけでなく彼女の家族までしょっぴかれますから、いくら口が固い人でも、話せません」

肩をすくめるトウマに、カイが苦笑した。

「俺も元軍人だ、その辺は心得てるさ。連邦軍が動いてる確証が得られただけでも、来た値打ちがあった。連れ回して悪かったな」

そう言っただけで席を立ったカイに、トウマが言った。

「こちらこそ、助けて頂いて有難うございました」

「また何かあったら、報せて欲しい。勿論、言える範囲で構わない」

そう言っただけで、カイはトウマの前のトレーの脇に、名刺を差し出した。

「わかりました。と言っても、実際にこれ以上の事がわかるとは思えませんけど」

「わからなければ、特に連絡してくる必要は無いさ」

そう言っただけで、カイは自分の分のトレーを持ち、立ち去った。

「あの人に協力して貰えたら、戦争を止められるかもしれない……」

トウマは、カイの名刺を見つめながら、呟いた。

#### 第4話 ジオンの鼓動（後書き）

とりあえず、ストーリーの背景が分かれると思われる部分のアップが必要と考え、細部の公正以外はほぼそのままモバゲーから移植しています。

気まぐれな更新になります。宜しくお付き合い下さい。

## 第5話 2人の距離（前書き）

トウマとルナの別れが近づく。

18年間、共に過ごした二人の気持ちや思い出も、連邦とジオンの確執という呪いが、すべて呑み込んでいく。

若い2人の歯車が噛み合う時間が、彼らの意思に関係なく、終わろうとしていた。

## 第5話 2人の距離

両親共に夜勤があり、まだ出番者への引継ぎも終わっていないのだろ。相変わらず誰もいない自宅に戻ったトウマは、自室のベッドに寝転がり、昨日、ルナに看病してもらっていた時間を思い出していた。

額を撫でてくれたルナの手の温もり、ルナが作ってくれたお粥の味、考え事をせずにはちゃんと休むように諭す、ルナの声。

今まで、当たり前だった、ルナの存在。

何日か後には、ルナはもう傍には居なくなってしまう。話があまりにも突然すぎて、トウマには、どうしても実感が沸かなかった。

「ルナは、今どうしてるんだろ……」

ふと、今朝のルナが号泣していた顔が、トウマの頭に浮かんだ。心配になったトウマは、ルナの様子を見に、2軒先のルナの自宅へ向かった。

呼び鈴を鳴らすと、父のユウキがトウマを出迎えた。

「トウマ君、無事だったか」

「今朝はごめんなさい、混乱しちゃって。ルナは大丈夫？」

「まだ泣き疲れて眠ったまま、目を覚ましてないよ」

「そうか……」

何も出来ないトウマが、視線を落とした。

「時間があつたら、暫くルナの傍に居てやってくれないか？今の俺が、親としてルナに出来る事は、トウマ君にそう言うこと位しか無いから」

力無く言うユウキの言葉に、トウマが頷いた。

トウマは、ルナの部屋のドアをノックしてみたが、返事は無かった。

「ルナ、入るよ？」

トウマが声をかけたが、やはり返事は無かった。トウマが部屋に入ると、ルナは今朝泣き疲れて眠ったまま、まだ目を覚ましていなかった。眠っている間にも何度も涙を流したらしく、ルナの目尻の涙の跡は、まだ渴いてはいなかった。

トウマは、ルナのデスクチェアをベッドの横に移動させて、腰かけた。丁度寝返りを打ち、トウマの方を向いた顔の前に並んだルナの手を、そっと握ってみる。

この温かさが、もう数日後には、感じる事が出来なくなる。やはり、トウマにはまだ実感が湧かない。

ルナが、夢の中でも手を握っているのか、トウマの手をそっと握り返した。

同じ頃、アムロ＝レイは、ケネディ空港からのシャトルに乗り込み、地球を発とうとしていた。

目的は、「アナハイムエレクトロニクス」の現在の本社・月のフォーン＝ブラウンに入ったという、キュベレイMk-?のサンプル機を見学するためである。

出来るものならアムロ自ら、ついでにサイド3に入りジオンの動静を探りたいものだが、何しろドラマの主題になってしまう程の有名な人である。実際に動いたら、あつという間に顔が割れる。それこそ、ピラニアの居る池を素潜りするようなものだ。

「やっぱり、軍人があまり有名になるのも、具合が悪いんですね」

シャトルの客室に入り、アムロが複雑な顔をしてラックに荷物を放りあげる様子を見て、若い女性がくすくと笑った。

「そんなに変な顔をしてたか？俺は」

アムロが少しムツとした顔で、女性を軽く睨んだ。その視線に、すみません、と肩をすくめる女性。だが、その仕草も、どこかチャーミングに見える。

153cmのスレンダーな体型に、ショートボブというよりはオカツパに近い髪型の、サラサラとした綺麗な栗色の髪、童顔の丸顔が、余計に彼女が軍人に見えない理由のひとつになっていた。

彼女の能力自体は諜報・モビルスーツ操縦とも非常に優秀なのだが、外見で損をする典型例と言える。

「俺たちは遊びに行く訳じゃないんだ、もう少し気を引き締めてくれないか？エイミー少尉」

「すみません、アムロ大尉」

元来、アムロは良くも悪くも生真面目で几帳面。エイミーと呼ばれた女性も、別に気を緩めたつもりはなかったのだが、キュベレイの事を全くとって良い程知らないアムロは、未知のモビルスーツを見る緊張感で、神経質になっていた。ゆえに、エイミーが笑ったのが、緊張感が無いように見えてしまったのである。

ララアに母親を求めているシャアが時折女性と交際していたのと同様に、アムロは母のカマリアに対し、一年戦争時代の出来事や再婚などのいざこざで嫌悪感を持っていた事もあり、自分から女性を求めるような事は無かった。

またニュータイプの反乱を恐れた連邦軍による幽閉生活が長く、10代後半から20代前半という一番女性に興味を持つ筈の時期に世間から隔離されていたため、あまり女性に興味を持つ事が出来なかった。

そのため、どうしても自分の事で女性が笑うと、嘲笑われている気がして不機嫌になるのである。

アムロが、エイミーを見て尋ねた。

「キュベレイのサイコミュという装置は、機能的にはガンダムのも

バイオセンサーと何が違うんだ？」

「ファンネルという遠隔操作式の小型ビーム砲を、砲撃や移動を含めて思念波だけでコントロールするものです。機体の操縦補助にも用いることができます」

「「エルメス」の「ビット」と同じか」

アムロの声が若干沈んだのにエイミーは気付いたが、あえて気付かないフリをして頷いた。

「そのとおりです。厳密には、ハマーン・カーンが率いたアクシズが、ビットの制御装置を小型化して、モビルスーツに積める大きさにしたものです。ファンネルと呼ばれるビーム砲も、エルメスのビットより小型ですが、出力や稼働時間は通常のビームライフルと差して変わらず、持久戦になると頻繁に機体に戻してエネルギーをリロードする必要があります。核融合炉を内蔵していたビットよりは、総合性能では劣るものと思われれます」

「なるほど。確かに攻撃力は上がるかもしれないが……」

エイミーは、ララアの名前を出すとまた咎められると思い、心の中でアムロの言いたいことを代弁した。

”自分が、ララアというパイロットと同じくジオンの技術に頼るには、やはり抵抗がある……か”

「しかし……」

「分かってる。ビットと同様の武器を使いこなせるのは、空間把握

能力が高いニュータイプだけ。俺がそうならなければ、ジオン……  
シヤアには勝てない」

エイミーが心配げな表情になったのを察して、アムロが言った。例  
えジオンの技術に抵抗があるうと、そんなつまらないプライドのため  
に戦死するより、使えるものは使って生き延びる方がいいに決ま  
っている。

”こんな歳の子に悟られるようじゃ、軍を引つ張るなんて無理だ。  
もつと俺がしっかりしないと、ただでさえ今の連邦軍は、砂上の楼  
閣なんだから……”

アムロは心の中で苦笑したが、今後は出来るだけ表情を隠すべきで  
あると考え、ポーカーフェイスを通す事にした。だが、後日シヤア  
と対峙する事によって、そのささやかな決意は破られる事になる。

「俺だって、自分をニュータイプの端くれだと思える程度に、自惚  
れられるように、努力はするさ。だからこそ、使えるものは貪欲に  
取り込んで行かなければいけないんだ。とりあえず、そのキュベレ  
イにしたって、俺が使えるものかどうかは、動かしてみなければわ  
からないしな」

「現在は、まだ残骸を寄せ集めて復元したばかりで、ファンネルま  
では手が回らないようですが、我々の到着までに整備を済ませるよ  
うに要請してあります」

「俺はそういった事務的な部分には明るくない。その辺りの事は任  
せるよ」

アムロの表情がようやく柔らかくなったのに安心し、エイミーは頷

いた。

「本当なら、抑止力というのではなく」

「アースノイドとスペースノイドが仲良く出来ればいいんだが……これだけ確執が大きくては、難しいだろうな。だからこそ、俺たちはスペースノイド……いや、人類が暴走するのを防げるように、より高性能なブレーキにならなきゃいけないんだ」

「そうですね」

”私のような人間を増やさないためにも……私自身も頑張らないといけない”

エイミーは心の中で呟いた。

『間もなく、当機の離陸準備を開始致します。皆様、ご着席の上、シートベルトを「ご着用下さい……」』

合成音声のアナウンスが流れ、シャトルが離陸準備に入った。

ロンド・ベルと合流する必要があったユウキの都合で、先に引越す必要があったルナの家は、同じくロンド・ベルに配属となる新造艦のラー・カイルムが丁度フォン「ブラウン」で完成してロンデニオンに向かうため、一旦ルナ達が居るフェニックスに寄り、新造艦で荷物を運んでくれることになった。

他にも、ラー・カイラムの乗員の4分の1は、フェニックスから異動になる者だから、経費削減を進める最中の軍としても、余計な費用を少しでも抑えたいのだろう。

昨夜の哨戒勤務を終え、自宅に戻ったコウイチは、トウマが家に居ないのを確認し、ルナの家に向かった。ユウキにも、その事を伝える必要があったからである。

「分かった。ありがとう」

ユウキは、沈んだ表情ながら、なんとか笑顔を見せ、コウイチに礼を言った。

「トウマ達は？」

「ルナが泣き疲れて、まだ眠っている。トウマ君に様子を見てもらってる」

「そうか……」

夜勤明けの疲労もあり、コウイチがふうつと溜め息をつく。

「世界の平和を守るつもりで連邦軍に入ったんだがな」

「自分の子供の幸せも守れないんだもんな……笑っちまうよ」

ユウキが、コウイチの言いたい事を代弁した。しかし、2人とも今更再就職も難しい歳である。高校生の子供がいるとなると、簡単には辞められない。まして、今居る場所はジオン共和国。何時戦場に

なるかも分からない情勢である。

「そろそろ、準備をさせるか」

ユウキが、腰を上げた。

「ルナちゃん、サイド1に行くよりも、フォン＝ブラウンに来る方が安全じゃないか？良かったら、俺たちで住む場所を手配しようか」

「そうだな……考えさせてみるよ」

「トウマみたいに男の子なら、それほど心配しなくても済むのにな。ルナちゃんは良い子だから、余計に心配だ」

「ルナが悪い訳じゃ無いからな。むしろ女の子に生まれてくれて、感謝してる。こんな状況になりさえしなければ、心配する必要なんか無いくらい、良くできた子だよ。親バカを差し引いてもな」

ユウキが苦笑した。背中越しでも、コウイチには寂しげな表情が読み取れる位、ユウキの背中が小さく見えた。それくらい、幼馴染みである2人の付き合いは長いのである。

「ユウキ、お前、大丈夫か？ロンド・ベルに行ったら、その調子じゃ務まらないぞ？」

「それまでには、気持ちを切り替えるさ。2人の様子を見てくるよ」

ユウキが部屋を出た後、コウイチがテーブルに頬杖をついた。

「親友の笑顔すら守れないんだな、今の俺たちは。軍の力って、こ

んな程度でしかないのか」

自嘲気味に言った後、コウイチが溜め息をついた。

「トウマはともかく、ルナちゃんがかawaiiそうだよな、俺たちの都合で振り回されて……」

18年間、毎日のように顔を合わせていれば、自分の娘のような感覚にもなってしまう。男親とは、どうしても女の子を鼻屑してしまうものである。

ルナの心情を思い、コウイチはまた溜め息をついた。

トウマとルナも軍人の子供なので、いつ引越しても良いようにと、部屋には教科書など学校に必要な物以外には、最小限のものしか置いていない。荷造り自体は、割と簡単に済ませられる。

出来るだけ一緒に居られる時間をとってやりたいと考えたユウキは、昼過ぎに目を覚ましたルナとトウマをテーブルへ呼んで向き合い、フォン＝ブラウン行きの話をしたが、ルナは首を横に振った。

「確かにトウマとは一緒に居たい。でも、私がフォン＝ブラウンへ行ったら、お父さんたちと一緒にいられないじゃない。お母さん一人の時に、発作を起こしたらどうするの？ 宿泊勤務明けに気付いたら手遅れだった、なんて嫌だよ」

ルナの母・ミカルは、以前、狭心症の発作で手術を受けている。現在は生活に問題は無いが、いつ発作が出て命に関わるような事態になるとも限らない。ルナは、それを心配しているのである。

「大人の心臓だし、小児の時みたいに執刀医の勘だけで冠動脈を繋ぐ訳じゃないから、大丈夫よ」

親しかったご近所に挨拶をしてきたミカルが戻ってきて、ルナに言った。

「トウマは、どうしたら良いと思う?」

「二度と会えない訳じゃないし、メールや電話は出来るから、ルナが後悔しないなら、おばさんに付いてあげた方がいいかもしれないね。発作で手遅れになった時の事を考えたら、確かにルナが正しいと思う。俺たちは、戦争が終わってからゆっくり会えばいいからさ。俺の気持ちは絶対に変わらないから、心配しなくていいよ」

この時点で、自分がロンデニオンへついて行くという発想が出て来なかったトウマにとっては、苦渋の決断ではあったが、ルナの迷う姿を見ていられず、背中を押してやるつもりだった。

「父さん達がさっさと戦争を終わらせるか、開戦前にジオンの連中を黙らせてくれることに期待してるから、頑張つてよ」

トウマが、コウイチとユウキを交互に見た。強がって笑顔を見せる。

「自分たちの親を信じよう、ルナ」

普通のいち高校生であるトウマには、まだルナを守り通せるだけの

経済力も、社会的な力も無い。一緒に来て欲しいなどと口にする事は、この時のトウマには出来なかった。

本心では止めて欲しかったルナにとっては、予想外の答えだった。

2人のすれ違いは、この頃から既に始まっていたのである。

ルナの母・ミカルが専業主婦なのに対し、トウマの母・マナミは軍病院の看護師。職業柄、引き継ぎの必要があり、2ヶ月遅れて合流する事になった。

この翌日の哨戒勤務、つまり父親同士（親友同士）の会話の翌日の出勤後、コウイチはフェニックスの周辺警戒にコロニー外へ出る際、フォン＝ブラウンからフェリーされてきた試作機に搭乗するよう命じられた。

「キュベレイMK-？って、この間の建国祭で展示されてたやつか？ちゃんと動くのかよ？」

「ニュータイプ専用機らしいが、今回はその機能が復元出来てないから、モビルスーツとして動くかどうかチェックするだけ。ジムやハイザックと一緒にだよ」

同じ歳の上司の楽観的な表情に、コウイチは苦笑して搭乗前のブリーフィングを済ませ、極めてイレギュラーな乗機・キュベレイMK-？へと向かった。

だが、これが後に、彼のみならずトウマの運命をも変えてしまう事になるうとは、誰一人予想してはいなかった。

## 第6話 情報統制（前書き）

暫くはフェニックスに残ることになり、メールや双方向通信テレビで、ルナの無事を確認する日々が続いたトウマ。

しかし、突然のサイド3全域に及ぶ通信障害が、二人の距離を決定的なものにした。

## 第6話 情報統制

トウマと別れてすぐに、カイはトウマの話をレポートにまとめ、サイド1に送信する作業を続けていた。その作業は、相手からの情報もあるため、それを読みながら、必要な事柄をピックアップしながらの作業になる。

ピックアップした情報が真実であるかどうかは、カイ自身で判断しなければならなかったため、どうしても時間がかかる。その日の作業も夜を徹し、明け方まで続いた。

トウマと出会ってから既に一晩。いつもなら朝のコーヒーを入れるスイッチ代りになっているカーテンの隙間から洩れる朝日にも気付かず、カイはある異変に気付き、レポートを作成していたパソコンの画面に顔を近づけた。

” 何だ？送信エラーだと……？ ”

最初はよくある事だと自分に言い聞かせ、姿勢を直したカイだったが、時間が経つにつれエラーの回数が増えていく。

” まずい。どっちがおかしいのか、確認の必要がある ”

使っているパソコンの故障なのか、軍か何かの情報統制によるジャミングなのか、はたまた回線が偶然に混雑しただけなのか。

区別できなかったカイは、確認したい事があると、休日となるその日の翌日、先日トウマと別れた喫茶店で、再びトウマに会う連絡をつけた。

「トウマ、お前の携帯のメール、サイド1に届くか？」

いつもの白スーツを身に付けたカイが、会うなり真剣な表情で、声を響めてトウマに訪ねる。ジーンズに綿シャツのラフな服装のトウマが、その意図を理解し切れずに、いぶかしげにカイに尋ねた。

「昨日まではちゃんと返事もありませんでしたよ。なんでです？」

「サイド3以外の、どこにも送信できねえんだ」

反射的に、トウマは携帯電話を取りだし、画面を見た。アンテナの表示は良好。高校の友人からのメールも2件、ちゃんと受信している。

「異常は無さそうですけど……」

「なんでもいい。試しに送信してみてください」

真剣な表情のカイに気圧されながら、トウマはルナの携帯電話へメールを送信した。

”昨日も送ったけど、無事で居るか？”

それだけ打ち込んで、メールを送信する。10秒と経たないうちに返信が来た。トウマが「随分早いな」と呟いて内容を確認すると、受信内容はルナからの返信ではなく、エラーメッセージの自動返信だった。

「えっ!？」

トウマが、慌てて再送信する。だが、また同じメッセージが帰ってきた。

「そんな!!何で!？」

「ジオンによる情報統制が始まったんだ。これじゃ、外部の情報は殆ど入って来なくなるぞ」

「ルナとは、もう連絡は取れなくなるって事ですか!？」

「それだけじゃない。下手をすれば、事実さえねじ曲げられた情報しか、入って来ないかもしれない。平和ボケしかかってる駐留軍が、踊らされなけりゃ良いんだがな……」

カイが、右手で額を抱えるような仕草をして、顔をしかめた。

「俺は、サイド3を出す。これ以上此処に居たら、戦時統制を理由に出られなくなっちまう。そうなったら、真実が見えなくなる」

「俺も連れて行って下さい!このままルナに会えなくなるなんて、耐えられない!!」

ルナとの連絡手段を断たれ、切羽詰まったトウマが、カイの両肩を掴んで、必死の表情で懇願する。

「駄目だ。俺は職業用パスポートだから怪しまれずに済むが、お前は一般用パスポートだから怪しまれる。下手をすればスパイの嫌疑をかけられるぞ。そうなったら、サイド1のルナって娘にも嫌疑がかけられる。こんな情勢だ、そうなったら、向こうだってただではすまない」

カイが真剣な表情で諭す。だが、トウマは怯まなかった。

「何とかありますよ!!」

「バカ野郎！家族はどうすんだ！？二度と戻れなくなる上に、サイド1で不法滞在者になるつもりか!？」

「ロンデニオンは連邦資本だし、連邦政府と軍のビザがあるから、不法扱いにはなりません。観光申請すれば、正規の手続きで滞在できます」

「申請期限前に戦争が始まったら、どうしようも無いんだぞ!？それこそ不法滞在になっちまう」

「戻って見せますよ」

若さの特権という奴だろう。こうなったら、誰がどう説得しても、テコでも動かなくなる。大抵の若者はそうなのだ。カイ自身もそうだった経験があるため、自分で痛い目を見るのが一番だろうと、諦めることにした。

「仕方が無い。パスポートと、生活費の用意をしろ。今日の午後に

は出なけりゃならん。日が沈む頃には、入出国も制限がかかる筈だ」

「わかりました」

そう言つて、一旦トウマはカイと別れ、必要な物を用意し、入国管理局で再びカイと落ち合った。

両親は例の如く家に居らず、トウマは誰に咎められる事もなく、手続きを済ませた。

「覚悟は良いな？」

念押しするカイの目を、トウマはまっすぐに見つめ、黙って力強く頷いた。

「よし。行くぞ」

サイド1のコロニー「ロンデニオン」に向かう2人を乗せたシャトルは、定刻に「フェニックス」を出港した。

だが、サイド3の空域をシャトルが出ようとした直後、異変は突然発生した。

「あれは……モビルスーツ!？」

乗客の一人が、窓の外を見て叫んだ。反射的に、カイとトウマも窓の外を見た。

「あれは……ネオ〓ジオンのザク?に似てるが、違うな。ジオンの新型か!？」

カイが、声を押し殺して呟いた。

トウマの目にも、カイは明らかに、新しいモビルスーツを見て、浮き足立っているように見えた。

ジャーナリストの性というやつだろう。我が身の危険より、どうしても新しい事実の方に身を乗り出してしまふ。

ザクマシンガンに似た銃器を持った、モスグリーンの機体が3機。そのうち一機がシャトルに近づき、後部の貨物ハッチを開けさせ、パイロットがシャトルに乗り込んで来た。

「何で、ジオンが民間機のシャトルを襲う必要があるんだ？」

トウマが、当然の疑問を口にするが、答えはしばらくして、彼にも明確に解る形で出た。

モスグリーンの、ジオンの紋章をあしらったパイロットスーツを着たジオン兵が、気密確保のため貨物ハッチを閉じさせ、客室に入ってきた。

カイは、ジオンが自分を探して監禁し、情報統制を強めようとしているのだと直感し、アイマスクと花粉防止マスクを手早く身に着け、トウマの影に隠れて寝ているフリを始めた。

カイのその様子を見て、トウマは、自分が如何に危険な事に首を突っ込もうとしているかを思い知り、青ざめて全身から冷や汗を流していた。事態の重苦しさに、思わず放心状態になる。

そのトウマの影のアイマスクに、ジオン兵が気付いた。左手に持った拳銃で、カイを指す。

「おい、隣の男を起こせ」

放心状態で、その声が聞こえなかったトウマは、恐怖と後悔で身動きひとつ出来ない。それを無視されたと勘違いしたジオン兵が、トウマの胸ぐらを掴み上げた。

「聞こえないのか!!」

最後部の席だったため、背もたれの後ろの壁に叩きつけられたトウマは、その衝撃で我に帰ったが、同時に激しい怒りを覚えた。

ジオン兵がトウマを放り出し、カイの肩に手をかけようとした、その時だった。

トウマがジオン兵の右手首を掴み上げ、腕を捻る形で後ろ手に、相手の背中に手の甲を叩きつけ、間接を極めた。

不意打ちの上に、肘の間接をもろに極められたジオン兵が、痛みのみあまり声も出せずに顔をしかめた瞬間、トウマの左背負い投げでジオン兵が壁に叩きつけられ、意識を失った。

突然の事態に、さすがのカイも声が出せずに、呆然としている。

「俺はこのまま、カイさんの身代わりになって、ジオンに連行され

ます。カイさんは、身代わりがバレル前に、真実を全宇宙に発信して、戦争を止めるための根回しをして下さい」

トウマが、座席の上にセットされている、緊急用のノーマルスーツを取り出しながら、カイに言った。

「お前、死ぬつもりか！？そんなのがバレたら」

「この機会を利用して、俺がジオンの内部に潜入して攪乱します。この手で戦争を止めてみせる」

カイの言葉を遮り、トウマが強い口調で言った。

「こんなやり方で、民間のシャトルまで襲うような連中を、黙って見過ごす訳にはいかない。こんな奴らが起こした戦争に、ルナが巻き込まれて死んだりしたら、俺は発狂してしまう。黙って見ているだけなんてごめんだ」

そう言って、トウマは取り出したノーマルスーツと、まだ気を失ったままのジオン兵を、客室後部のドアの向こうへ投げ出した。

「後は頼みます」

それが、カイとトウマが交わした、開戦前の最後の言葉になった。

このトウマの行動が、開戦の引き金を引くことになるとは、誰もが思ってもいなかった。

トウマは、シャトル後部の、客室と貨物ハッチの間のデッキで、ジオン兵のパイロットスーツを奪い非常用のノーマルスーツを着せ、自分は奪ったジオンのパイロットスーツを着て、腰についていた拳銃の残弾数を確認した。

その後トウマが、銃を手にしたまま、バイザーが降りていないジオン兵の顔を目掛けて踵を落とし、鼻に叩きつけてジオン兵を無理やり起こさせた。

すぐさま、2 m程の間合いをとる。宇宙空間は無重力のため、どんなに訓練していようが、生身では素早い大きな動きは出来ないから、簡単に銃を奪われないようにするためである。呻き声をあげて気付いたジオン兵に、トウマが拳銃を向ける。

「抵抗すればどうなるか、わかるね？」

トウマは、自分でも驚く程、落ち着いた声で言った。ジオン兵は、両手を頭の後ろ組み、黙って頷いた。

「連れて行ってもらおうか」

トウマの言葉に、ジオン兵が頷き、シャトルの貨物ハッチから、「ザクもどき」こと「キラ・ドーガ」のコックピットに移動する。

白いノーマルスーツのジオン兵の背骨あたりに拳銃を突きつけながら、トウマがジオン兵にピタリと寄り添うように、キラ・ドーガに近づぐ。

コックピットまで数mまで近づいて、トウマが体を反転させ、さきにコックピットに潜り込み、リニアシートの背後の補助シートを引き出す。トウマが、拳銃でジオン兵を促して、リニアシートに座らせた。

「とりあえず、通常通りに振る舞ってもらおうか。あまりおかしな行動をされても、お互いに困るからな」

トウマの言葉に、ジオン兵が頷いた。

トウマの言う”お互いに”とは、生身の高校生のガキ相手に、瞬時に締め上げられ、しかも拳銃を奪われて自分が脅迫されている現状を、このジオン兵が仲間に気付かれたら、恥をさらすどころの騒ぎ

では無いだろうという、トウマからの暗の圧力だった。

言葉の意味を理解したジオン兵が、左右の操縦レバーを握る。

「上手くいったようだな」

仲間の2機からの連絡だろう。無線機のスピーカーから、声が聞こえた。

「ああ。確保した。引き上げよう」

背後から、トウマに銃を突きつけられたまま、ジオン兵が応え、3機のギラ・ドーガが空域を離脱しようと、背中メインバーニアを吹かした。

「うっ……!!」

イベント時のシミュレーターやゲームセンターでは、何十回と最高得点をマークしたトウマも、流石に実物の加速Gを体験したのは初めてである。その感覚に、小さな呻き声をあげた。

ギラ・ドーガのメインバーニアが発する青白い光を、シャトルの窓

から眺めていたカイは、その光が視界から消えた後、力尽きたようにリクライニングシートに体を預け、天井を見上げて呟いた。

「あいつ、一体どうするつもりなんだ？」

## 第7話 開戦の狼煙（前書き）

トウマを乗せたギラ・ドーガが、連邦軍のモビルスーツを製造する  
アナハイムⅡエレクトロニクスで試験中だったモビルスーツと接触。

交戦状態に入り、遂に戦争が始まる。

## 第7話 開戦の狼煙

トウマを乗せたギラ・ドーガが、15分ほど飛行を続け、サイド3のコロニーが、レーダーに映り始めた頃だった。

「こんな所で、敵機……!?!」

近年のモビルスーツでは標準的な、パイロットシートの少し前、ちょうど足の間から突き出る形で設置されているヘッドアップディスプレイに、トウマが慌てて視線を向ける。

警報音と共に、レーダー画面に映った識別信号はE・表示色は赤。味方以外は基本的に敵と認識されるのが戦場である。

飛来した方角から、月の一番地球寄りにある、最大の月面都市・フオン・ブラウンから来たと思われる、敵と表示された機体は、こちらにはまだ気付いていないらしく、レーダー中心（自機の位置）には来ず、画面の端を行ったり来たりしている。何かの訓練でもしているのだろうか。

「まずいな、こんな所でこんな時期にドンパチやらかす訳にはいかないし、どうするか」

僚機からの通信に、トウマを乗せたジオン兵が応えた。

「放っておこう。見てる限りでは、ギラ・ドーガの方が速いようだ。いざとなったら逃げ切るさ」

「まだ開戦の時期ではないってことか？」

パイロット同士の通信に、トウマが補助シートから割り込むように尋ねた。

「連邦への宣戦布告は、正式に行く。それまでは、我々も力を温存する必要がある」

ジオン兵が、そこまで言った時だった。

敵と表示された機体は、突然方角を変え、レーダー画面の中心に向かって来た。

「まずい、見つかった！残骸の影に隠れる！」

3機のギラ・ドーガが散開して、相手のレーダーに映らないよう、ミノフスキー粒子という電波攪乱物質を散布し、それぞれが隕石の

欠片や、コロニーなどの破片に姿を隠した。

さらに念のため、全ての電波発信装置の電源を落とし、息を潜める。ここからは、有視界（目視）で敵を探す事になる。

1年戦争時代の残骸はとても回収しきれぬ量ではなく、サイド3の外郭部にあたるこの周辺にも、未だにその傷跡を生々しく残っていた。

”相手の機種は、何なんだ？”

トウマも、息を潜めて、相手の機体を探す。

このような張り詰めた空気の中では、数分の時間でも、何時間も経ったかのように感じる。どの位、時間が経った頃だろうか。

”あれは……キュベレイ！？”

トウマとジオン兵が、同時に機体名を思い浮かべた。同じ機体名が浮かんだということは、間違いないのだろう。

「なんで、こんな所で、こんな時期に、キュベレイが来るんだ？」

トウマが、無意識に、当然の疑問を口にした。しかも、先日のジオン建国祭で展示されていたものとは、色が全く違い、全体的に淡いグレーで塗られている。

「ハマーン…カーンの亡霊……!?!」

トウマを乗せていたジオン兵の体が、小刻みに震えている。色合いは異なるが、かつてネオ…ジオンを率いた実力を持つ、パールホワイトの「ハマーン…カーン専用機」だった頃のキュベレイを実際に見たことがある者なら、先日の赤いカラーリングよりは、確かに目の前の機体の方が、遥かに威圧感を感じるだろう。

「おい、大丈夫か？」

トウマの問いに、震えたままのジオン兵が応えない。恐怖感のあまり、思考や聴覚がまともに働かなくなっているのだろう。

”まずいな”

トウマが心の中で舌打ちしたが、このままでは状況は変わりそうにない。目の前のライトグレーのキュベレイは、まだ用心深くギラ・ドーガを探している。

震えるジオン兵の手が、ほんの僅かだが、操縦レバーをずらした。その動きが、新鋭機ならではの敏感さで、乗機ギラ・ドーガの腕を動かし、小さな岩を小突いた。

不自然に流れた岩を目敏く見つけたキュベレイが、一気に加速してトウマの乗るギラ・ドーガに向かって来た。

「バカ！何やってんだ！？気付かれたじゃないか！！」

ジオン兵の体が、震えを通り越し痙攣に近い挙動になった。もはやパイロットとしては、役に立たない。

「ちいっ！操縦替われ！」

そう怒鳴り、トウマはジオン兵を上へ押し退け、リニアシートに座り操縦レバーを握った。

「カイさんが新型だと言っていた！ロートル（旧型）に負けるかよ！！」

ゲームセンターと同じように、いきなりロケットエンジンのペダル



呆れ返ったトウマが渾身の力を込めて叫ぶが、残念ながら他には武器は無い。まだキュベレイからの狙撃は続いている。

「まだ戦闘をやらかすのがまずいというのなら、俺の手で戦闘を仕掛けて、ジオンを自滅に追い込んでやる！！誰だか知らないが、キュベレイのパイロット！悪く思うなよ！！」

模擬弾しか入っていないマシンガンを投げ捨て、両手にビームサーベルを構えたトウマのギラ・ドーガが、一気にキュベレイとの間合いを詰める。

本来ならキュベレイは、ファンネルという遠隔操作式ビーム砲を使えるのだが、何故かこの機体は、それを使わなかった。

「おおおおっ！！」

キュベレイのライフルが弾切れになった隙について、トウマが雄叫びをあげながら、ギラ・ドーガの両手のビームサーベルを、十字に交差させるように振り下ろす。突撃が予想外だったのか、慌ててのけ反るように、キュベレイがそれをかわす。

大振りになったトウマのギラ・ドーガの隙を見逃さず、すかさずキュベレイがライフルのリロードを済ませ、再びライフルの銃口をトウマのギラ・ドーガに向ける。

「殺られる……!!」

トウマがそう思った瞬間、他の2機が飛び出し、模擬弾であるペイント弾をキュベレイの頭部目掛けて一斉に乱射し、頭部のメインカメラの目潰しに成功した。

とっさの事で状況が把握出来なかったのか、キュベレイは突然メイバーニアを全開で吹かし、逃げ出した。

「逃がすか!!」

追おうとしたトウマのギラ・ドーガの前に、僚機2機が機体を割り込ませて制止した。

『よせ! まともにもやりあって勝てる機体じゃない! それに、今は戦闘をする時期じゃない!!』

「……!!」

時期はともかく、勝てる機体では無いという点は、正論だった。先ほどロートル呼ばわりしていたトウマだが、キュベレイは製造年式

も2年ほどしか変わらず、しかも特殊技能を持つ人間と言われる「二  
ユータイプ」専用の高性能機。こちらは、いくら新しくても汎用の  
雑魚でしかないのである。

「ちくしょう!」

ここで開戦してしまえば、ジオンは準備不足のまま戦争に突入し、  
簡単に潰せると考えていたトウマは、思い切り肘掛けを叩いた。

”俺の手で開戦させるのが無理なら、仕方がない。このまま戻って、  
内部からジオンを混乱させてやる”

トウマは、このままジオンに戻ることを決意した。この決断が、  
後の悲劇を生むことになるとは、予想だにしていなかった。

「ふう……まさかテスト飛行中に、敵機と接触するなんてな」

グレー濃淡の、アナハイム・エレクトロニクス試験機カラーのキュ  
ベレイMk-?を操縦していた、コウイチナギツジ、つまりトウ  
マの父は、突然の敵機との遭遇に、肝を冷やした。

コウイチ自身も、地球時代は数少ない陸戦型ガンダムで一年戦争を戦い抜き、グリプス戦役の頃はアツシマー隊の小隊長を務め、そのコックピットでシャアの「ダカール演説」を聞いた一人。

ニュータイプと呼ばれる技能は無い為にファンネルこそ使えないが、操縦技術や戦術眼はそれなりに持っているパイロットである。

だからこそ、ペイント弾で目潰しをされた直後、すぐに空域を離脱し、まともに交戦するのを避けた。

現在、彼が乗っているキュベレイMk-?は、単純にモビルスーツとしてちゃんと機能するかどうかを確認するだけの試験飛行が目的のため、ビームライフルしか武器が無く、予備弾倉もライフル本体に付けてあった一つ以外に持っていない。

また装備時に手首に隠されているビームサーベルも、本来両手にある筈のだが、まだ整備中で今は持ってきていない。

つまり、このキュベレイMk-?にはまともな戦闘が可能な武器は無く、3機の新型機を相手に連携で攻められたら、持久戦に持ち込まれた場合、彼に勝ち目は無かったのである。

彼は、アナハイムでのテストパイロットを担当することになり、顔見せの為に新しい勤務先に出向いた際、丁度、残骸を集め終わって

形になったばかりのキュベレイ Mk-? が飛行試験を開始するところに出くわして、アナハイムの責任者が彼の腕を見極める意味もあって、宇宙でのテストを引き受けたのである。

その試験飛行の最中に、敵機の表示がレーダーに映り、故障ではないかと確認に来てみたら、いきなり襲撃を受けた。

キュベレイのレーダーは、正常であることが証明されたのだった。

「しかし……似てはいたがザク？じゃなかったな。あの機体、一体何処で製造されて、何処の所属なんだ？」

コウイチは首を捻った。

コウイチと接触した3機のギラ・ドーガは、ジオンの紋章を機体と同色のステッカーで隠していた上、まだ出来たばかりの試作機。

しかも、サイド3の連邦資本であるアナハイムII エレクトロニクス・フェニックス工場製。

つまり、コウイチ達が住んでいたコロニーで造られていたのである。

ズムシティなど、ジオン共和国資本のコロニーは、セキュリティに  
関しても非常にシビアな分、コロニー外からの資材の出入りに関し  
ても、2重3重のチェックが入るため、予定外の搬入があれば即座  
に連邦政府に連絡が入る。

だが、フェニックスはセキュリティ関係が非常に甘いため、資材の  
出入りの管理も、ノーチェックに限りなく近い状態であった。

だから、アナハイムがわざわざ申告しない限り、連邦政府にバレる  
ことなど、有り得ない状態だったのである。

「連邦直轄工場とアナハイム以外に、モビルスーツを新造出来る技  
術を持っているメーカーなんて、無い筈なんだがな」

コウイチは、そこまで考えて、ある結論に達した。

「そういえば、被弾したのはペイント弾だったな。ということは、  
俺の腕を試してやろうという、軍かアナハイムの連中のイタズラか。  
全く、タチの悪い趣向だな」

宇宙空間で余計なことをして、故障でもすれば、それこそ生きて帰  
れない状況になる。まして、コウイチが乗っているキュベレイMK  
-？は、飛行試験中の機体、つまりいつ故障してもおかしくない、  
相応の緊張感を強いられる機体なのである。

「いきなり転勤になったと思ったら、この仕打ちかよ。俺もいよいよストラ対象になっちまったか？」

てつきり、新しい職場からのパワハラ（パワーハラスメント：上司からの職権濫用による嫌がらせ）と思い込んだコウイチは、忌々しげに顔を歪めて呟き、密かに退職を決意していた。

だが、それは帰投後の報告時に、撤回することになる。

第8話 投降 (前書き)

キュベレイMk-?との交戦後、自軍基地に戻ろうとしたトウマたちのキラ・ドーガ。

トウマが乗る機体に、背を向けた2機を見てトウマが考えた事は

## 第8話 投降

『とりあえず、引き上げよう。燃料の残りも少ない』

一緒に居た機体のパイロットが溜め息混じりに言って、トウマが乗るギラ・ドーガを促し、トウマに背を向けた。

だが、その隙だらけの背中を見たトウマは、メインバーニアの青白い光が明るくなったのを見て、また良からぬ事を考え始めていた。

” 待てよ……このままフォン＝ブラウンの連邦軍の基地へこの機体を持っていけば、ジオンを倒せる機体が出来るんじゃないのか？ シヤアだって、戦果をあげ始めの頃はザクだったんだから、今回もこのギラ・ドーガとかいう機体をベースにして、新しい専用機を造るかもしれないじゃないか。そうだ、それなら……！！ ”

トウマは、座っている座席の背後で未だに目を覚まさないジオン兵の胸ぐらを掴み、ギラ・ドーガのハッチを開けて、ジオン兵を機体外へ放り出した。

すぐさまハッチを閉じ、サイド3・フェニックスの裏口の港へ向かおうと他の2機が加速した瞬間、逆方向のフォン＝ブラウンへと向かって加速した。

『しかし、何でキュベレイの識別信号が敵だったんだらう？連邦にキュベレイが横流しされたのかな？』

トウマが乗った機体がついてきていると思っ込んでいたパイロットは、レーダーを見ずに話していたのだが、返事が無いことを不審に思い、何気無く機体を後ろに振り向かせた。

「……居ない!?」

慌ててレーダーを見る。まだサイド3空域も直前まで続いていた戦争の影響で、ミノフスキー粒子が濃い箇所が多く、トウマが乗る機体はレーダーに映ったり消えたりしている。

だが、流石に新型機と言える結構な移動速度を保ったまま移動中のトウマの機体は、瞬く間にレーダー画面の端まで届こうとしている。

「まさか……乗っ取られた!?」

トウマ機に声を掛けたつもりだったパイロットが顔色を変えた。だが、そこまで言い終わらないうちに、レーダーの画像から完全にトウマ機の機影が消えた。

「しまった！そっいえば、奴もモビルスーツのパイロットだったと

聞いたことが……！」

カイを拉致したと思い込んでいたもう一機のパイロットが思い出したように叫んで、忌々しげに奥歯を噛み締める。

アムロ程には有名ではないが、カイも一時期、モビルスーツ「ガンキャノン」のパイロットだった経験があり、カイ本人が操縦して逃亡したと思ったからである。

まさか、ゲーム好きのいち高校生に盗まれた等とは、二人とも夢にも思っていない。

『今から追っても追いつけない。とりあえず戻ろう』

青ざめつつも何とか台詞を絞り出し、唇を噛む同僚を促したパイロットがメインバーニアを噴かして拠点を目指し、もう一機がそれに続いた。

トウマの操縦するギラ・ドーガは、サイド3の空域を離脱し、地球連邦軍の基地がある月面都市・フォン・ブラウン市を目指して、飛行を続けていた。

いつクーデターが起こるか判らないサイド3空域の基地や、現在でも水面下でのジオン支持者が多いグラナダでは、只でさえジオン公国軍を象徴する「ザク」に似ているギラ・ドーガでは、クーデターを煽る恐れもある。

それよりは、フォン・ブラウンの方が、連邦軍にとって安全な上、モビルスーツ研究施設もあることから、新型機の開発に大いに役立つ筈だと考えたのである。

だが、試験飛行中の機体に、急旋回や急上昇が何度も必要な戦闘行為が満足に出来るだけの推進剤（メインバーニアの燃料に相当する噴射剤）を積んでいる筈も無く、流石に推進剤は残り僅か。更に、コックピット内の酸素まで残り少なくなってきた。

「まずいな。せめて着くまでで良いから、もってこれれば良いけど……！！」

素人のトウマが冷静で居られる筈が有る訳がない。次第にトウマの顔に、焦りと苛立ちの色が明確に浮かび始める。

そこへ、レーダーの端に、敵艦の表示が出た。敵の接近を知らせるアラームが鳴り響き、それと同時に大型戦艦の主砲からと思われる火線が数本、トウマのギラ・ドーガを掠めた。

「げっ……マジかよ!?!」

トウマが慌てて機体を上下左右に振り、再び襲ってきた火線を辛うじてかわす。だが、砲撃手がかなりの腕前らしく、全力でバーニアを噴かしても、ほんの数メートルの誤差で火線が次々に通過する。鋼鉄の機体を貫通できるエネルギーを持つ光の束が目の前を乱舞する恐怖に、トウマが慌てふためく。

「このままじゃ撃墜される!何とかしないと……!!」

そのうち、砲撃してきた戦艦から、武装していると思われるモビルスーツが次々に出てきた。レーダー画面で見えるまでも無く、まっすぐにトウマの居場所へと向かってくる。迫りくる死の恐怖に、堪らずトウマがパニックになり、全力を振り絞って叫んだ。

「こんな所で死にたくない!助けて!!ルナ!!!!」

『ルナ?』

聞いたことのある声が、呆気に取られた様子で間の抜けた声を出し、おうむ返しに無線の向こうで言った。ジオン兵達がやり取りしたまま、無線のスイッチが入ったままになっていたのである。

『ルナとは、誰かの名前か？』

敵である善の無線の音が、トウマに聞き返した。恐らく、近づいてくるジム？の編隊の先頭にいる隊長機と思われる機体の主の声だろう。

だが、まだ盛大に混乱しているトウマの脳は、声の主の正体に気づいていない。相手の言葉を聞き、それを理解する事が精一杯だった。

「ルナ？無意識に、ルナの名前を呼んだのか？俺は」

その声を聞いた相手が、突然大声を出した。

『まさか、お前、トウマか！？』

「えっ……もしかして、父さんか！？」

両者が互いの正体に気付き、目を見開く。

『お前、何やってんだ！？』

「助けて！酸素も燃料も無くなりそうなんだ！！」

『はあ！？お前、なんでそんなのに乗ってるんだよ！？』

「何でも良いから早く助けて！！死んじゃうだろ！？」

『投降信号を出せ、右肘掛けの裏にボタンがある筈だ』

コウイチの指示どおりに、トウマが肘掛けの裏を手探りで探す。ボタンを押し込むと、レーダーの自機表示が黄色から緑に変わり、「投降」の表示が出た。

『よし、捕獲するぞ。トッティ、手伝ってくれ』

無線越しに、もう一機のジム？にコウイチが指示を出すのが聞こえる。すぐにトウマのキラ・ドーガが、ジム？に両脇を抱えられた。

『艦に着いたらゆっくり話を聞かせてもらおう。そのまま大人しくしてろ』

コウイチの声は、いつになく厳しいものだった。

「父さん、ごめん」

コウイチからの返事は無いまま、トウマ達は連邦軍のモビルスーツ積載用巡洋艦「ネエル・アーガマ」に辿り着いた。

ネエル・アーガマは、自力で地球に降りる為に必要な装備を取り付ける改造を受ける目的で、フォン・ブラウンに向けて航行中だった。

直前の戦争で地球に降りたネオ・ジオンの残党のテロやゲリラ活動が活発化して来たため、先に地球に降りていた類似形状の「アーガマ」だけでは足りないと思込まれる戦力の補充のためである。

コウイチは、先程のキュベレイがペイント弾で目潰しを受け、帰還している最中にトウマと同じようにネエル・アーガマに出くわし、やはり同じように両脇を抱えられて連行されて来ていたのだった。

「全く、親子揃って連行されて来るとは……ナギツジ大尉、君の一族は何を考えているんだ？しかも揃いも揃って、ネオ・ジオンの機体に乗っているなど、偶然とは思えんが」

艦長代理のグリード「フォスキンスが、トウマより頭一つ高い目線から呆れたような声で言い、精悍な印象を台無しにするような白い目でコウイチを見た。だが、トウマがムツとした表情で口を挟んだ。

「俺が乗っていたシャトルが、あのギラ・ドーガに乗っていたネオ・ジオンに襲われたんです。おそらく、同乗していたカイ・シデンというジャーナリストを監禁して、サイド3での情報統制を図る事が目的だったのだと思います。俺は、それを阻止しようとカイさんとすり代わってあの機体に乗って来ただけで、連邦軍に引き渡して新しいモビルスーツを作るための参考にして欲しいと思ったから、フオンブラウンに持っていかうとしたんです」

「我々ですら知らないネオ・ジオンの新型機を、なぜ訓練もしていない君が乗りこなせるのかね？」

「一般公開の対戦イベントやゲームセンターでは負けたことはありませんし、ゲームならガンダムやギャプランだって操縦してますから、動かすだけなら誰だって出来ますよ」

厳しい口調で問いただしたグリードに、トウマが尻すぼみな口調になって肩をすくめる。

「まあいい、とりあえず所持品と身元の調査が終わるまでは、独房で大人しくしてもらおう」

「わかりました」

グリードの言葉に、トウマが素直に頷いた。独房とは穏やかではないが、戦艦の類に乗るのは初めてであるトウマにとっては、勝手が判らない場所でウロウロするより、大人しく責任者の指示に従う方が無難だと思われたからである。

その翌日、ネエル・アーガマは、フォンニブラウンに到着した。

第9話 調査結果 (前書き)

トウマによって、捕獲(強奪?)されたギラ・ドーガの調査が、フオン・ブラウンのアナハイム・エレクトロニクスで終了した。

その結果は 。

## 第9話 調査結果

ネエル・アーガマがフォン・ブラウンに入った直後、トウマの身边調査が終了し、協力者として軍からのお咎め無しが確定した。

だが、コウイチはそうはいかなかった。ネエル・アーガマには、キユベレイMK-?が武器が無いとはいえ飛べる状態で、しかも連邦軍管轄下の機体が存在するなどとは連絡が入っていなかったからである。

トウマは民間人だが、コウイチは軍人。まして、乗っていたのがネオ・ジオンでも有数の戦闘力を誇り、一時的にはいえ地球をも席卷したハマーン・カーンの搭乗機の直系とあつては、只でさえ水面下で不穏な動きが有るといふネオ・ジオンと密通している可能性が少なからず疑われたからである。

「とりあえず俺が解放されるまで、新居の下見でもしてる。後で話を聞く」

トウマは、コウイチに睨まれながらネエル・アーガマを後にし、青空や海水が無い以外は地球の港とそれほど変わらない景色の軍港を通り過ぎて、フォン・ブラウンの市街地に出た。

トウマはサイド1・ロンデニオン（現住所のフェニックスを起点に

見るとほぼ逆方向）に行くためのビザしか持っていないので、本来は不法滞在になるところだが、今回は無傷のギラ・ドーガを持ち込んだ功績で、特別に軍からの許可証が発行され、トウマはフォンⅡブラウンに1日だけ滞在して、通常運航のシャトルでフェニックスへ引越しの荷物を取りに戻る事になった。

だが、特にフェニックスと変わる点も見つからず、ひととおり街を見終わった後は特にすることが無くなったトウマは、ふと携帯電話を見た。

だが、こちら情報統制に入ったらしく、ルナやカイからのメールは、届いてはいなかった。送信しても、やはりエラーメッセージが返ってくる。

「くそ……！」

携帯電話の画面を見ながら、トウマは無意識にネエル・アーガマを降りた軍港に戻って来ていた。見知らぬ街で迷っても困ると、本能的に考えていたからだろう。

「一般回線ではフォンⅡブラウン市内以外への通信連絡は出来ないよ。いま現在、ここから連絡できるのは、アンマンだけだ」

軍港の傍らで舌打ちしたトウマに、聞き覚えのある声があった。

「あつ……確かネエル・アーガマの艦長さん」

「正確には艦長代理だがね。こんな所で、どうした？」

特に咎める様子も無く、むしろ子供相手に苦笑している様子のグリードが、穏やかな声で尋ねた。

「携帯の画面を見ながら歩いてたら、無意識に戻ってきちゃいました」

言外に咎められたと勘違いして一瞬ビクツと肩をすくめたトウマが、グリードの表情にほっとした様子で頭を掻いた。それが事実だから、他に言いようがない。

「新居の見学は済んだのかね？」

「はい。周りの町並みも、ひととおり見て来ました」

「することが無ければ、この後、例のキラ・ドーガとやらの調査結果を、アナハイムまで聞きに行くんだが、一緒に行かないかね？」

意外な誘いに、トウマが目を輝かせる。

「良いんですか？ああいうことは、軍機（軍事機密）では……？」

「流石に軍人の息子だな。君が持って来てくれたんだ、君にも、見る位は権利があるだろう」

そう言っつてグリードは笑った。

「ぜひお願いします!!」

トウマが満面の笑みを浮かべて、頭を下げた。

軍港の傍らからエレカ（電気自動車）に乗り、トウマ達はアナハイム・エレクトロニクスのフォン・ブラウン工場を目指した。

ネエル・アーガマから降ろされたと思われる、ジム？やネモ、グレイのキュベレイが、地球では見たことの無いような大きさのトレーラー（概寸で長さ20m×幅6m）に横たわり、それが何台も連な

って同じ方向に走っていく。

他には軍用と思われるジープタイプや装甲車のような車しか走っていないので、軍の専用道路なのだろう。走るエレカの正面を見ず、意図的に横を見ていたトウマは、他人事のようにそんな事を考えていた。

自分が交戦して、ペンキまみれにしたモバイルスーツの後をエレカで追うというのは、なんとも後ろめたい気分になる。トウマには非常に居心地が悪い。気を紛らわそうと、トウマがグリードに尋ねた。

「あのモバイルスーツも、アナハイムに行くんですか？」

「あのキュベレイMK-？は、残骸を寄せ集めたサンプルだそうだが、私も詳しくは知らないが、まだ研究中らしい」

「まさか、あれをガンダムに改造したりとかは、しませんよね？」

「今、もしガンダムを造るとしたら、ファンネルは積むつもりかもしれない」

その返答に、トウマの表情が曇る。

「やっぱり、戦争になるんですか？ネエル・アーガマだって、そのための改造なんですよね？」

「ネエル・アーガマの改造は、大気圏に降りるための改造だ。ジオンの動きとは、直接関係がある訳じゃない。今まで連邦軍が弱体化していたから、地球のテロ組織の活動が活発になってる。その掃討に、アーガマと艦隊を組ませて、効率化を図るんだ。あの2隻は、どっちも連邦軍の規格じゃないから、使いにくくてね。戦力的には優秀なんだが、連邦の他の艦船と足並みが揃わない。だから、2隻を組ませて、作戦を立てやすくするのさ」

「本当に、ジオンとは関係ないんですか？」

「ネエル・アーガマも、ホワイトベースみたいな地球から自力で脱出、という機能は付けない予定だ。宇宙で戦争になりそうだという話は、今のところは私も聞いていない。君が持ってきたギラ・ドーガを見て、私も初めてジオンが動くかもしれないと実感した。だが、今回の調査結果を元に新型機を造る事になる筈だ。君のお陰で、最初から連邦が有利に戦える」

グリードがそう言って笑った。だが、トウマの中に、新たな疑問が湧いた。

「でも、最初のザクが出来た時は、ジオンが圧倒的に有利だったの

に、ガンダムが出来てから連邦が逆転したんですよね？あまり樂觀  
しない方が良くないんじゃ……」

「よく知ってるね、確かにその通りだ。だからこそ、我々も全力は  
尽くすさ。君たち若者が、戦争をしなくて済むようにね」

グリードの話し方は、あくまでも穏やかだった。

その後、数分でトウマ達はアナハイム・エレクトロニクスの工場に  
入った。

「余計な所に入ったら、スパイ容疑で銃殺刑だから、離れないよう  
にな」

グリードが、脅すようにトウマに念押しする。思わず顔をしかめる  
トウマ。

「余計なことさえしなければ、大丈夫さ。トイレに行く時は、ちゃ  
んと言ってくれば、問題は無いよ」

グリードがトウマを見て笑う。

アナハイムの職員に案内され、トウマたちが向かった部屋に、コウイチが居た。他の士官も十数人が集まっていたが、廊下の窓越しに見える面々は、揃いも揃って顔が青い。

その様子に、トウマとグリードが顔を見合わせる。

「何だか、様子がおかしいですね」

「確かにな」

グリードが部屋のドアを開けると、士官たちが一斉に踵を合わせ、敬礼した。

「ご足労をお掛けし、申し訳ありません、フォスキンス大佐」

コウイチが進み出て、グリードに言った。が、その傍らに居るトウマの姿に、コウイチが思わず固まる。

「……………なんで此処に居る？」

「偶然街で会って、連れてきて貰ったんだ。ギラ・ドーガの調査結果を、見てみないかって」

” グリッド艦長って、大佐だったんだ。ずいぶん気さくに話してくれたし、そんな偉い人には見えなかったけど……”

トウマが思った後、グリッドがコウイチに尋ねた。

「それよりも、大尉クラスの連中が雁首揃えて、何を青ざめてるんだね？外から見てたら、何事かと思ったぞ」

「……こちらをご覧ください。例のギラ・ドーガのデータです。まだ諸元だけで、詳細はこれから調べるそうですが」

コウイチが、グリッドにコミック本くらいの厚さの、A4版の資料を渡し、グリッドがそのページを捲っていく。だが、10ページほどで、その手が止まった。まるで、この世の終わりが来たような目で見開かれたまま、グリッドの表情が硬直する。

「……？」

トウマが、いぶかしげにその表情を覗き込む。

「どうしたんです？大佐？」

返事が無い。『ただのしかばねのようだ』と表示されそうな程、見事な硬直具合だ。

仕方なく、コウイチに尋ねる。

「父さん、一体どうなってるんだ？」

トウマの質問に、コウイチは想像もしなかった返事をした。

「……今までの連邦軍の機体では、勝てない」

「何を言ってるんだよ、連邦軍が勝てない訳が」

「ガンダムが必要だ……それも、今までのガンダムじゃダメだ。ガンダムだけじゃない、支援するジムも要る。おそらく、新しいガンダムが完成したとしても、単独では勝てない」

グリードが口を挟んだ。居合わせた士官たちの顔から、血の気が引

いていく。

「父さん、大丈夫？」

「トウマ、よくやってくれた。後は俺たちに任せろ。お前の手に負える状況じゃない」

立ち眩みを我慢しながら、辛うじて立っているコウイチの言葉に、トウマが激しく嘔みついた。

「何言ってるんだ、俺は、またルナと何時でも会えるように」

「俺だけならまだしも、お前まで戦争に出たら、母さんはどうするんだ？」

「じゃあ俺とルナの気持ちはどうなるんだ！？俺たちだって、一緒になりたい！母さんとルナとどっちが大事か比べさせて、戦争に出さないなんて、卑怯だよ！」

「それが、普通の親の気持ちだ。お前も、今くらいは普通の子供の反応をしておけ」

諭すように、落ち着いた声で言うコウイチの目は、悲しみとつらさに満ちていた。その目は、ルナが号泣した日の、ユウキと同じ目だった。それを思い出したトウマが、二の句を失う。

「……父さんも、俺とルナが一緒になることを、望んでたの？」

「息子の幸せを望まない親が、何処の世界に居る？ルナちゃんと一緒に居るときのお前の目を見れば、誰が見ても分かるぞ」

コウイチがそこまで言った時だった。

地響きと共に建物が揺れ、街が見える窓が次々に割れていく。

ガラスの破片を巻き込んだ爆風が、部屋中を襲い、顔を庇う彼らの腕を血に染めていった。

「一体、何が起きた！？」

爆風が収まり、外を見たトウマが、状況を把握できないまま叫んだ。

コウイチが、割れた窓の外にギラ・ドーガを見つけ、トウマに向かって怒鳴った。

「トウマ、シェルターへ避難しろ！」

「父さんはどうするの!?!」

「警備用のジム?を借りて迎撃する!」

「なら俺も」

再び外部からの爆風で、トウマが5m程飛ばされて、分析室の壁に激突した。コウイチも爆風に体を押され、背後の席のパソコンモニターに頭をぶつける。

「トウマ!地下のシェルターまで走れっ!こんな所で死んで、ルナちゃんに二度と会えなくなっても良いのか!?!」

「……………!?!」

コウイチの剣幕に圧され、爆風が止んだ隙にトウマが立ち上がる。

「父さん、ごめん!?!」

走り出したトウマの背中を見ながら、そうだ、それで良い……と、コウイチが呟いた。

散乱した部屋の片隅に投げ出されたウエットティッシュで、額と目の回りの血を拭い、コウイチ自身も、体が動く限りの速さで、警備用ジムの格納庫へと走り出した。

待機用シエルターは、地下2階にある。トウマは、コウイチからは地下としか聞いていなかったため、瓦礫だらけの階段を走り、ひたすら地下を目指す。

だが、駆け下りて来た階段は既に屋根が崩壊して埋まり、地下へは行けそうに無くなっていた。トウマがそれを見て、絶望感に襲われる。

「嘘だろ……！？どうすりゃ良いんだ!？」

## 第10話 招かれざる客（前書き）

地下のシエルターを目指して走るトウマ。

しかし、瓦礫で埋まった階段を見て、絶望感に襲われる。

その間にも、攻撃が続き、追い詰められたトウマが取った行動が、招かれざる客を呼び出した。

## 第10話 招かれざる客

瓦礫に埋もれた地下シエルターへの階段を呆然と眺めていたトウマだが、その暇すら与えないと言わんばかりに、建物の外で大きな爆発音が響き、建物が再び大きく揺れた。

「まずい、逃げ場がない……。こうなったら、俺もモバイルスーツを借りに行くしかないか……！」

仕方なく、ガラスが吹き飛ばされた目の前のドアから、トウマが外へ飛び出した。だが、数歩目を踏み込んだ瞬間、トウマの足元が落とし穴に嵌まったように崩壊し、その穴の中にトウマの体が吸い込まれた。

突然の事に思考が停止し、悲鳴をあげることも出来ないまま、地下と思われる空間に放り出されたトウマの体は、5m程落ちた所で金網のような何かに受け止められるようにぶつかり、バウンドした。

尻と背中を打ったものの、空手での反射神経が幸いし、受け身をとる事が出来たトウマの目に、あるはずのないものが映った。

”ガンダム……？”

我に帰ったトウマは、自分の周囲を見回した。トウマの体は、航空機や電車の屋根を塗装するような足場に乗っていて、その網目板にシヨックがある程度吸収されて助かったようだ。

その足場は、横たえられたガンダムと思われる額に角の付いた白いモビルスーツの周囲に、纏わりつくように組まれていた。

そこまでトウマが認識できた直後、また地震のような地響きで、トウマが乗っている足場が大きく揺さぶられた。

「あれに乗らなきゃ、落ちる……!!」

足場の高さは10m程、落ちれば例え死ななくても、足首位は折れるだろう。そうだったら、逃げられない。死を覚悟したトウマは、モビルスーツに向かって走り、コックピットに潜り込んだ。

「動くのか、こいつ!？」

ゲームのジムや、先日動かしたギラ・ドーガと同じ位置にある電源ボタンを押す。緑のボタンが光り、座席のやや前方にある枠の無い透過型のディスプレイに、画面に触れてくださいと表示された。

「さっさと起動しろよ、ガンダムのくせに!!」

苛立つトウマが、人差し指を叩きつけるように画面に触れた。瞬時に全天周コックピットの壁面に外界の様子が映し出され、足の間の各ボタンが光を放つ。起動は完了したようだ。

『至近距離に敵機反応。月面都市内のため接近戦のみ可能。戦闘を開始しますか？』

穏やかな落ち着いた女性の声が、律儀に質問してきた。その声が、トウマの焦りと苛立ちをピークにさせた。

「何でも良いから、さっさと動けよ！死んじゃうたろ!？」

『了解』

落ち着いた声で一言だけ発した後、フルオートでガンダムが動き出した。トウマが操縦レバーを動かすが、全く利いていない。

「どうなってるんだ!! 操縦が出来ない!？」

『地上に出ます』

トウマが落下したと思われる穴に、自動操縦のまま肘打ちを放ち、機体を地表に出すべく、ガンダムが立ち上がった。

コウイチと思われるジム？が、6機のギラ・ドーガと交戦している。両者とも手練れらしく、地面にはビームライフルは放つが、天蓋で覆われている上空方向には、一切ビームを放たない。ネオ・ジオン側も、出来るだけ被害を小さく抑えて制圧したいから、好き放題に破壊活動をする訳にもいかないのだろう。

『戦闘を開始します』

女性の声が一言言った後、いきなり全開でメインバーニアを吹かし、交戦していると真ん中に、ガンダムが躍り出た。

「うわああ！いきなり飛び出すな！勝てる訳無いだろう！？」

トウマが叫んだ刹那、自動的に突き出されたガンダムの右手のビームサーベルが、ギラ・ドーガの一機を真っ二つに切り裂いた。

「……………え？」

呆気にとられるトウマをよそに、ジムと鏝迫り合いを演じる一機以

外のキラ・ドーガが、僚機の爆発に気付き、一斉に飛びかかって来た。

「うわあああ！！ルナ、助けて！！」

トウマが無意識にペダルを踏み込み、ガンダムが一気にキラ・ドーガの頭上を越える高さまで飛翔した。突然の行動に目標を見失ったキラ・ドーガの動きが、一斉に止まる。

キラ・ドーガの頭上50m程の高さから見下ろす形になったトウマが、はっと気付いて、トリガーボタンを押しこむ。

左すねの側面部にセットされたビームライフルを、ガンダムが素早く掴み、連射を開始した。1本のビームで1機ずつ、的確にキラ・ドーガのコックピットを撃ち抜く。向かってきた4機全てに穴が開くまで、0.5秒と掛からない早撃ちだった。

これと同時に、ジム？のビームサーベルが、鏝迫り合いをしていたキラ・ドーガのコックピットを貫通する。ジムがバックステップで爆発を避け、戦闘が終了した。

「どこから出てきたんだ？あのガンダム……ん？ガンダムだと！！  
??？」

コウイチが、上空に佇むガンダムと思われる機体を見上げて首を傾げ、もう一度見上げて目を見開き絶叫した。

目の前のモビルスーツには、いかついバックパックを背負っていて、数年前に起こった戦争で使われた「フルアーマーZZガンダム」や「EX-Sガンダム」<sup>イクスエス</sup>を彷彿とさせるシルエットを持ち、確かに額に2本の角が生えている。間違いなくガンダムの意匠だ。

戦闘が終わった安堵感と同時に、コウイチを襲ったのは、脱力感と絶望感だった。開戦を止める事は、自分には出来なかったと、コウイチは悟ったのである。

「戦争が、始まる……」

まだ空中に佇むガンダムのコックピットで、トウマは呆然とギラ・ドーガの炎上する様子を眺めていた。

「これが、戦争……」

蒼白な顔色で呟いたトウマにしてみれば、つい先日は自分がギラ・

ドーガを操縦していた。つまり、一歩間違えば、自分があの炎の中に居たかも知れないのである。

地面にキラ・ドーガの破片が散乱しながら落下していき、それがあちこちの建物の瓦礫を押し潰す。その中に、人の腕か足が見えたような気がして、思わず、トウマは目を背けた。

『そのガンダムのパイロット、聞こえるか?』

携帯電話で聞き慣れた声に、我に返ったトウマは、慌てて返事をした。

「ごめんなさい、他にどうしようも無くて……」

『お前、トウマか!?!』

コウイチが驚いた声を出す。

『何でお前がガンダムに!?!俺だってボンコツの陸戦型しか乗ったこと無いのに!?!』

「……怒る所はそこかよ」

『とりあえず降りてこい、こりゃ始末書じゃすまんかもな……』

「父さん、ごめん」

『まあ仕方がない、緊急事態だったんだ。不可抗力と思うしかないな』

コウイチのジム？が、やれやれと両手を上げた。

同じ頃、アムロが乗っていたシャトルは、月の手前のサイド4・テキサスで待機するよう軍から指示を受け、テキサスの港で食料と燃料の補給を受けていた。

アムロは、シャトルの船長に身分証を見せ、待機の理由を尋ねた。

「何でと言われても、港に不具合があったとしか聞いていませんし、そんな所に突撃して宇宙に放り出されたくはありませんから、安全が確認されるまでは出港は出来ませんよ。ここも荒廃してはいますが、宇宙空間で待機するよりは何倍も安全だ」

「港に不具合が？」

怪訝そうな顔をするアムロに、船長が苦笑した。

「開閉装置が故障したんじゃないですか？何処のコロニーも、戦争で荒んでしまってますからね」

「それは、俺たちに対する皮肉かい？」

「そう聞こえたのなら、謝りますよ。とりあえず、下手な憶測で何か言って間違ってたなら、えらい事になりますし、連邦軍からの命令ですから、大人しく従うのが無難と判断します」

「わかった。ありがとう」

席に戻ったアムロは、エイミーに向かって首を振った。

「当分は動けそうも無いな」

「まさかと思いますが、戦闘があつたとは考えられませんか？」

エイミーが、真剣な表情で尋ねた。

「どうだろうな。有り得ない話でも無いが」

アムロが、語尾を濁した。

「失礼ですが、アムロ〱レイ大尉ではありませんか？」

エイミーと同じ歳くらいの、20代前半と見える若い男が、アムロに尋ねた。年齢の割には、きちんとスーツにネクタイをした落ち着いた格好をしていて、しぐさや話し方もかなり大人びて見える。

「君は？」

「申し遅れました。僕はアルフレッド〱イズルハと言います。ルポライターをしています」

そう言って、名刺をアムロに差し出した。そこに書かれた名前を見て、アムロは納得したように頷いた。

「確か、ティターンズの30バンチコロニーへの毒ガス注入事件を、最初にスクープしたライターが、この名前だったな。ならば、違うと言っても、無駄だろう。インタビューなら、軍の広報を通してくれないか？」

「この時期に貴方が動いているという事は、戦争が近い。だから新しいガンダムの開発にフォン・ブラウンに向かっている。違いますか？」

「今の時勢なら、俺がジムに乗っていても、何も問題は無いさ。まだ、ガンダムが必要な時期じゃない」

その言い回しに、アルフレッドが興味津々の様子でアムロに尋ねる。

「ガンダムが必要な時期とは？」

「戦争が近いと感じたら、厳つい武装の機体を造る事になるかも知れないが、今は、そんなのは必要無い。いま必要なのは、戦後復興を牽引する指導者。旧暦の頃、第2次世界大戦からの復興期に、日本を牽引した蒸気機関車のようなカリスマ性を持った存在だよ」

「ガンダムが、この戦後の時期を牽引する機関車になると、お考えですか？」

「なるほど、流石はルポライターだな。そういう風に表現されるのも、悪くは無い。もつとも、スペースノイドから見れば、ガンダムみたいな蒸気機関車は、煙たいだけの存在なんだろうがね。早く煙たくない電気機関車になれるように、努力するでしょう」

自嘲的に言って誤魔化そうとするアムロに、取り付くシマが無いと感じたアルフレッドは、それ以上は食い下がるのを諦めた。

「そういえば、さっき船長と何か話されてましたが、一体何をお話に？」

「足止めの理由と、出港の目処を尋ねただけだ。何もわからないが、軍からの指示だという話だ。無論、俺達も理由は分からない」

「分からない？」

「港に不具合があった、とは言っていた。確かに、俺だって港の空気ごと宇宙に放り出されたくは無いしな。大人しくキャプテンに従うわ」

アムロは、やれやれという風情で両手を挙げた。

アムロに礼を言い、自分の席に戻ったアルフレッドは、「ガンダムが世界の戦後復興を牽引する者になれば良いとアムロが考えている」と解釈し、すぐに世界に発信しようと、携帯電話でメールを打ち始めた。

情報統制により、連邦軍にその報せは止められたのだが、それにより連邦軍内部にガンダム新造・アムロが搭乗するとの噂が広まるきっかけとなった。

これにより、連邦軍復活の狼煙が上がったのである。

だが、それは同時にスペースノイドが、再び連邦軍への反感を持ち始めるきっかけにもなっていくことになるのである。

## 第10話 招かれざる客（後書き）

ここに来て、ようやくガンダム登場。

基本的には、見た目の説明通り、ZZとEX-Sの合いの子のようなもの、と考えていますが、あまり細かい部分のスペックはまだ考えていません。現時点では、大型バックパックは「自動操縦機能（ALICEみたいなもの）の演算装置」という設定にしようかと考えて中。

絵も下手だと言われた事は無いのですが、何故かガンダムを描くとガンダムに見えない絵になってしまい、現在「どうするべ〜？」と悩んでいます。

ぼちぼち考えていきますので、詳細についてはもう暫くお待ちください。

## 第11話 緊急発進（前書き）

約1週間のドック入りで、地球に降りる為の改造を済ませる筈だったネエル・アーガマ。

だが、軍からの指示は、ネエル・アーガマの緊急発進だった。

ガンダムの自動操縦が出しゃばりすぎて使いにくいと、憚然とした表情で伝えるトウマだったが、その訴えも却下されてしまう。

## 第11話 緊急発進

「天蓋を開けなきゃ、月面都市に入ることなんて出来ない筈なのに、さっきのギラ・ドーガって、何処からフォン・ブラウンに入ってきたんだろっ?」

ガンダムを着陸させたトウマが、ジム?のコウイチに尋ねた。だが、コウイチにも製造元すら分からないモビルスーツの事を尋ねられても、答えようが無く首を傾げるしかない。

『わからん。天蓋の故障や、テロに港の管制塔を乗っ取られたという連絡も無かったし、と言っても都市内で製造して隠し持っていたも、すぐにバレちまうからな。あのサイズの物体を、そう長い期間に渡って隠し続けるなど、出来っこない』

モビルスーツの身長は、およそ18m。ほぼ日本の電車1両分の高さである。そんな巨大なものを隠し続ける場所が、狭い月面都市に有る筈もない。

「じゃあ、何を狙ったと思う?」

『恐らくギラ・ドーガと、キュベレイMk-?だな。連邦軍が、ギラ・ドーガのデータを収集して新しいモビルスーツを造る事と、フアンネルを運用できる技術を持つ事を恐れたんだろっ』

それを聞いたトウマが、溜息とともに肩を落とし、声を嚙めた。

「じゃあ今回の襲撃は、半分は俺のせいなのか」

『ガンダムを隠してあったんだ、ギラ・ドーガやキュベレイが無かったって、いずれは狙われたさ。それよりも、お前があんな操縦が出るとは思わなかったな。正直、驚いたぞ』

「あれは俺じゃない。俺がトリガーボタンを押しただけで、ガンダムが勝手にビームライフルを構えて撃ったんだ」

『どっついう事だ？』

「殆ど自動操縦で動くんだけ、このガンダム。慣れてないパイロットが、いきなりあんな風に出て行ったら、死んじゃうよ。もっとパイロットの技量に合わせた動きをしてくれないと困る」

無然とした表情で言うトウマに、コウイチが呆れたような声を出した。

『ガンダム自体が、ある程度の技量を持ったパイロットが乗るとい

う大前提があるんだから、そんなの考える必要は無いだろ』

「完全にサポートに徹してくれるんなら有難いけど、ある程度の技量を持つてる人の操縦だと、かえって邪魔になる可能性があると思わない？」

『なるほど、そういう意味か。言われてみれば、確かにそうかもしれんな』

納得したコウイチに、トウマがやや困惑ぎみに尋ねた。

「とりあえず、このガンダム、どうしよう？地下に隠してあったからって、また埋めちゃダメだよな？」

『埋めちゃまった方が、世のためかも知れないがな』

「マジな声で言わないでよ」

即座に、トウマがツッコミを入れる。

『とりあえず、このジム？を警備室に返さなきゃならん。一緒に来い。その程度は出来るな？』

「ガンダムに言えば、勝手について行くよ」

『よし、行くぞ』

ジム？がメインバーニアを吹かし、警備室に向かって移動する。

「あのジムに、ついていってくれ」

『了解』

件の「女性の声」が言い、ガンダムが動き出した。

「自動操縦しか出来ないのかな、このガンダム」

トウムの呟きに、「声」が答える。

『一応、搭乗者の技量に合わせて動かすように指示をされています』

「じゃあ、さっきの戦闘では、俺が操縦するよりも自動操縦の方が

良いと判断したって事？」

『射撃の時は、押されたタイミングの方が適切だと判断されたため、指示に従いました』

そう言えば、トリガーボタンを押した時だけは、トウマの操作どおりに動いたような気がする。

「今の俺が操縦するよりは、任せた方が良いつて事か」

『私を遥かに上回るような操縦が出来る搭乗者ならば、私の出る幕はありません』

抑揚のない声が、さらりと言う。その言葉に、トウマが苦笑する。

「機械のくせに、面白い事を言うんだな」

『気持ちは人間ですから。それが人工知能というものです』

「ふーん……？そんなもんなのか？」

気が付くと、警備用の事務所の前に、コウイチのジム？に続いてガンダムも到着していた。

”ガンダムのコックピットにいるくせに、お喋りに気をとられて前も見て無いパイロットなんて、そりゃあ機械だってド素人だと思うよな”

トウマが思ったとき、コウイチと、グリードがガンダムのコックピットを見上げて、降りて来いと手招きした。

空中ブランコのような昇降装置でコックピットから降りたトウマが、グリードを見た。

「無事だったんですね、大佐」

「このガンダムが自動操縦で動くというのは、本当か？」

「ええ、射撃のタイミングだけは、俺がボタンを押したタイミングの方が良かったと言っていますが、それ以外は殆ど自動操縦でした。動きからの推測ですが、レーダーを基に敵機を認識して、それを射撃の標的にしているようです」

「成程な。わかった、ご苦勞様。しかし、パイロットの息子とはい

え、民間人の高校生に、度々救われるとは……全く、無様な軍隊だよな」

グリードが溜め息をついた。

「建物の被害は？中に居た人たちは、無事なんですか？」

「君のお陰で、最小限で済んだようだ。関係者の死者は居ない。キラ・ドーガやキュベレイも無事だ」

「さっき、人が押し潰されたように見えたんですが、あれは……？」

首を傾げるトウマの言葉に、グリードが、そういう事が、と何かを納得した様子で頷いた。

「さっき、アナハイムの社員の安否確認をした時に、試験装置の一部が壊れたと言っていた。もうデータ取りは終わったから、問題は無いらしいんだが、恐らくそれが」

「ガンダムの人工知能の試験装置、だと？」

トウマの言葉に、グリードが頷いた。

「恐らく、そんなところだろうな。ギラ・ドーガの侵入手段は、恐らく民間の貨物船に載せて故障したと救援を依頼し、入港したんだろう。昨日、救援を要請したグラナダから地球のホンコンへ向かう貨物船が、今朝、つまり入港翌日に直ったと言って出港している。その船に乗っていた可能性が高い」

「その船を追わないんですか？」

トウマが声を潜めて、グリードに尋ねる。

「準備はしているが、あまりにも急な事態だ。途中のサイド4で補給に寄れば足止めさせようと、いま網を張ったが、補給無しでホンコンへ向かわれたら捕まらない。いま、緊急事態として、改造を中止したネエル・アーガマに乗れる者を集められるだけ集めて追えと指示は受けたんだが、戦闘を想定していなかったから、索敵手も居なければパイロットも居ない。下手に追えば、ネエル・アーガマが沈む」

「なんて呑気な……！」

グリードの言葉に、トウマが思わず舌打ちした。だが、まだ何か言いたげなトウマの顔の前にコウイチが手をかざして発言を止め、指示を尋ねる軍人の顔に戻って、グリードを見た。

「仮に追うことになったとして、モビルスーツは何を積むんです？  
ネエル・アーガマからは全部降ろしてしまっていますし、ジム？以  
外に、まともに動かせる機体なんて、ここには有りませんよ？」

「これを使うしか無いだろうな」

グリードが、あまり気の進まない表情でガンダムを見上げた。だが、  
コウイチが困惑気味に口を挟む。

「しかし、誰が乗るんです？」

「とりあえず、ガンダムをネエル・アーガマまで運ぶ必要がある。  
ナギツジ大尉、頼んで良いか？」

「大佐はどうされるんですか？」

「エレカ（小型電気自動車）でネエル・アーガマに戻る。試作機に  
は補助シートは付いていないからな」

「あの……俺はどうしたら……？」

グリードとコウイチの会話に名前が出なかったトウマが、おずおずと口をはさんだ。民間人の彼が口を出しにくい雰囲気ではあったが、このまま放置されては不法滞在者になってしまう。その危機感がトウマの口を動かしたのである。

はっとした表情でグリードとコウイチが顔を見合わせた。互いに瞬時に眉間にしわを寄せ、視線で問いかけ合う。そして、何秒も経たないうちに互いに深い溜息をつき、グリードが重い雰囲気でも口を開いた。

「下手にフェニックスには戻らない方が良いでしょう。港までしか行けないが、私が途中まで乗せていこう」

グリードがトウマを促し、エレカに走った。コウイチもガンダムに乗り込み、ネエル・アーガマを指してバーニアを噴かした。

アナハイムを出たエレカは、3m程の高さの壁沿いに、アナハイムの外周を走る。

「すまないな、成り行きとはいえ、私のせいで怖い思いをさせてし

まっつて」

「いえ、ガンダムに乗れるなんて思っても見ませんでした。いい経験を見せて頂きました」

本当に申し訳なさそうに言うグリードに、トウマはむしる満足げに笑みを見せた。

「それに、父さんの実力も見ることが出来ました。正直、6機を相手にあそこまで粘るなんて、予想外でした。家じゃいつも寝てばかりだったから」

夜勤明けの昼寝をしているコウイチの姿を思い浮かべながら、トウマが苦笑した。

エレカが、港とトウマの新居方面に別れる交差点に差し掛かろうとした時、エレカを止めようとバックミラーを見たグリードが、不審な後続車に気付いた。

”拳銃!?”

覆面を着けた助手席の男が持っている拳銃の銃口が、明らかにこちらへ向いている。グリードが懐の拳銃を取り出し、ハンドルを右手

で握ったまま、ミラー越しに後方へ照準を合わせて発砲した。乗っているエレカのリアガラスが、グリードの発砲の度に、粉々に飛び散る。

「ひいっ！何だあっ！？」

グリードがアクセルをベタ踏みし、体を後ろに押し付けられたトウマが、悲鳴をあげる。

後続車からの銃弾が、トウマのすぐ横のサイドミラーを貫通し、破壊する。

「トウマ君、伏せてろ！死ぬぞ！！」

「拳銃を貸して下さい！足止めします！」

「無理だ！君は素人だし、こいつはデザートイーグル、357マグナムだ。素人が撃ったら、手首が折れる！」

「父さんに44オートマグの扱いまで習ってます、大丈夫！」

先程までとは別人のように落ち着いた声で言うトウマの顔を、グリ

ードが見た。トウマの目は混乱の色も無く、拳銃を扱うという状況に慣れた表情をしている。

「よし、頼む」

グリードから拳銃を受け取ったトウマが、背もたれに体をへばり付け、顎をヘッドレストに乗せて素早く銃を構える。

両手で握る銃の照準が左フロントタイヤに合った瞬間、トウマが二度、三度と引き金を引いた。引き金を引く度に357マグナム弾とブローバックの衝撃が腕に伝わり、車外に葉莢が飛んでいく。

発砲してきた車に狙い通り命中し、相手は歩道の段差に乗り上げ、植え込みの木の幹に激突して大破した。

だが、新手が現れ、再びカーチェイスが始まる。

「くそつ、キリが無い！」

再び銃を構えなおし、忌々しげに発砲しながらトウマが舌打ちした。

「モビルスーツ隊を呼ぶ、最低限、ナギツジ君が動ける筈だ」

グリードが携帯電話で、ネエル・アーガマに連絡を入れる。1分程で、コウイチが乗ったガンダムが到着し、頭部バルカン砲で、2台目の不審車を破壊する。

「この先にもう1台いる、そちらも始末してくれ」

グリードの言葉に、トウマが反論する。

「しかし、生身の人間相手にモビルスーツは」

「生かしてフォン・ブラウンを占拠されたら、面倒なことになる。やむを得ん」

「それじゃ、ただの人殺しじゃないですか!!」

感情的に怒鳴るトウマの目を、冷たさと非難の混じった目でグリードが見た。

「我々のしていることは、ゲームじゃない、戦争なのだ。誰かが死なない限り、戦争は終わらない。それに、我々が守るべきなのは、ジオンの兵士じゃない、民間人の命だ。彼らを生かすことで、フォ

ン!! ブラウンに住む民間人の命が危険に晒されるのは、本末転倒だ。違うかね?」

納得しかねるトウマだが、反論の言葉は、見つからなかった。

ぐっと拳を握りしめるトウマの頭上に、コウイチの乗るガンダムが引き上げてきた。その影に人工太陽の光源を遮られてガンダムに気づいたトウマが、忌々しげな目でガンダムを睨み付けた。

”違う、そんなの間違ってる! それじゃ、恨みと憎しみしか生み出さない。そんなんじや、戦争は永遠に終わらないじゃないか……なんで大人は、それがわからないんだ……!!”

「ネエル・アーガマに着いてしまった。銃を返してもらえるかね?」

グリードの言葉で我に帰ったトウマが、デザートイーグルの安全装置をかけ、無言のままグリードに手渡した。

ガンダムがネエル・アーガマに停止したエレカに追い付き、コウイチがコックピットのハッチから顔を出した。

「……無事ですか!?!」

「父さん、見損なつたよ。生身の人間相手に、ガンダムなんて!!」  
仇でも見るような目で、トウマがコウイチを睨み付け、出せるだけの声で怒鳴った。その視線を真つ向から受け止め、コウイチが凄みの効いた声で切り返した。

「……じゃあ、オーストラリアやアイルランドのコロニー落として家族を失った人達のような悲劇を、彼らを生かしたせいで繰り返すことになったら、お前は責任を取れるんだな？」

トウマが、言葉に詰まった。グリードは黙ってやり取りを聞いている。

「ジオンのコロニー落として、何人の民間人が死んだ？戦うことも出来ないまま、武器すら持つことの出来ない無抵抗の人間を、ジオンは何人殺した？彼らを見逃して、また同じような事がフォン・ブラウンで起これば、リニアのチューブで繋がってる月の全ての都市が、全滅してしまうんだぞ？お前は、その時に死ぬ全ての命の重さを、背負って生きる事が出来るんだな？」

抑制は効いているが、コウイチの声は軍人そのものの厳しいものだった。その迫力に、トウマの声が尻すばみになっていく。

「それは……」

「シドニーだけじゃない。あのコロニー落としの時の衝撃波で、他の都市に居た親戚の移民者が全滅して、俺だけが生き残ったんだ。やつらは、たったそれだけの命ですら、背負って生きていく意識のカケラも無い。そんな奴等に、殺される民間人を増やす訳にはいかないんだ。お前の言う人道的感情は、戦争が無い時に振り回せるものだ。戦時中にそんなのを振り回して自分が死んじまったら、理想もくそも無いだろうが！！違うか！！」

コウイチの言葉は、トウマには聞き覚えがあると感じた。

”時と場所を選んで正義感を振り回さねえと、いくらお前さんが正しいって、生きて帰れねえぞ。どんな素晴らしい思想を持ってたって、生きてなけりゃ実現は出来ねえんだ。少しは空気を読むってのも、大人になるには必要だぜ”

「あの時の、カイさんが言っていたのと、同じ……」

「カイ？ジャーナリストの、カイ〃シデンかね？」

表情が変わったトウマを横から覗き込んだグリードの言葉が、そこで遮られた。

『ネエル・アーガマに緊急救助要請！サイド4空域で、フォン＝ブラウン行きのシャトルが襲われた模様！アムロ＝レイ大尉が搭乗しているとの情報があるため、大至急救助に向かわれたし！』

非常放送が、軍港全体に流れる。

「アムロ＝レイだと!？」

コウイチが驚き、グリードを見る。

「いま彼を失ったら、連邦軍は空中分解してしまう!!これ以上は待てん、ネエル・アーガマを出すぞ!!ガンダムを載せてくれ!!」

グリードがコウイチに指示を出す。

「了解!!」

グリードの言葉に、コウイチが応えた。

「俺も乗せて下さい!!」

2人の会話に、トウマが割って入った。

その言葉に、コウイチが怒鳴り付ける。

「何をバカな事を」

「ジオンが潜入してるなら、此処に居たって安全なんかじゃ無いだろう!？」

「母さんは、どうするんだ!？」

「俺が此処に居て、一人でジオンのテロに巻き込まれても良いって言うのかよ!？まだ母さんは此処には来てないんだ、いくらでも方法はあるだろう!！」

『グリード!! フォスキンス大佐、大至急ネエル・アーガマのブリッジへお越し下さい! 操艦指示を出せる者が他に居ません!』

「全く、なんで他に居ないんだよ!」

艦外放送に、グリードがネエル・アーガマを見上げて怒鳴る。

「そうか、ラー・カイルムがもうロンデニオンに向かったから、そ  
うちに配備されて、みんな居なくなっただ。ブライト!! ノア大佐  
も、そっちに」

トウマの言葉を、グリードが苛立たしげに遮った。

「もういい、考えてる時間が無い! 行くぞ!! ガンダムを載せてく  
れ、緊急発進だ!!」

グリードがコウイチに怒鳴り、グリードとトウマも駆け出す。

「サイド4迄なら、ガンダムを先行させた方が早いんじゃないです  
か?」

「敵機が何機居るか分からん状況で、1機だけ出す訳にはいかない。  
相手の戦力を確認してからだ」

トウマの質問に、走りながらグリードが答える。

「モビルスーツデッキへ行きます! 整備要員、足りないでしょう!  
?」

「出来るのか!?!」

「機械科ですから、ジム?やハイザックは授業で触りました!何とかなる筈です!」

「わかった、やってみてくれ。壊すなよ!?!」

「まだ死にたく有りませんから、壊さない程度にやりますよ!」

グリードがブリッジに、トウマがモビルスーツ整備デッキに走った。

『現時点で動かせるモビルスーツと武装を、用意出来ただけ全て積載しました。実戦装備は、艦内でお願ひします。マニュアルは転送済みですので、しこ確認下さい』

月面都市グラナダを発進直後、アナハイム・エレクトロニクスからネエル・アーガマ艦長席のグリードへ通信が入った。

「わかった。機種の内容だけ聞いておきたい」

『我々が把握している範囲では、ジム？8機、ギラ・ドーガ1機、キュベレイMk-?1機とファンネル15基、全機分のビームサーベル、ビームライフルとエネルギーパック。予備は時間が無く用意出来ませんでしたので、サイド4のテキサスで補給を手配しました』

「テキサスまで持てば良いがな」

『「武運を」』

「ありがとう」

通信を終え、グリッドが呟いた。

「気楽な連中だ……！俺も転職しようか」

その直後、整備デッキから、インターホンを通した怒鳴りあいも聞こえてきた。

『ファンネル、ちゃんと動くの!?!』

『わかんねえよ、見た事も無いもの持って来てんだから！動くんじやないの！？』

グリードがインターホンに向かって何事かと尋ねると、メカニックらしき女性の声が、呆れたような、如何にも途方に暮れたような声で答えた。

『見た事も無いのが3機もあつたら、普通は途方にくれますよ』

「3機？」

『ガンダムにキュベレイMk-？、ギラ・ドーガですよ』

グリード達の会話に、軍艦ではあまり聞かないような、やや若い男の声が割り込んだ。

「トウマ君か？」

『他はともかく、ガンダムは本人に聞いてみれば解るでしょうから、コックピットで整備の仕方を聞いてきますよ』

「わかった。ガンダムは暫く君に任せた方が良さそうだな。ギラ・ドーガは無理かね？何しろ操縦した事があるのは、この艦では君だけしか居ない筈だからな」

「関節やメインエンジンも、見るからにジム？より厳ついですから、下手にバラして使えなくなっても困りますし、最低限の整備に止めた方が良さそうです。キュベレイも似たような感じみたいですけど」

「わかった。ジム？以外は、解る範囲で整備してくれ。下手に壊して戦力が下がったら一大事だ。ただでさえ戦力が無い状況だからな。アナハイムからマニュアルが届いてるから、後で持つて行く」

『わかりました』

インターホンの音声が途絶えた後、グリードが頭を抱えた。

「全く……素人の高校生が一番冷静だなんてなあ……なんて情けない戦艦だ！」

アムロの救助どころか、こっちが救助されるかも知れないと、本気でグリードが考え始め、堪らず頭を抱えた。

第12話 テキサスで（前書き）

少し時間は遡り、ネエル・アーガマの出港直前。

テキサスで足止めを食ったアムロたちは、軍の施設で話を聞こうと  
していた。

そこへ現れたのは

## 第12話 テキサスで

ネエル・アーガマがフォン＝ブラウンを発つ、少し前。

サイド4・テキサスでは、足止めを食っていたシャトルの乗客が、散策をしていた。既に、24時間を超えて待機させられているのだから、乗務員に対して乗客から文句の一つが出るのも無理は無い。

機長も、食料の調達のために、軍の補給部門に交渉に出て行った。残っているのは、外に出るのが億劫なインドア派の者だけである。

アムロとエイミーも、シャトルの外へ出て、少しでも適切な行動をとるための情報収集を図り、シャトルが拘留された港から歩いて10分とかならない位置にあるテキサスの連邦軍施設で、フォン＝ブラウンの状況について尋ねてみたが、離れた位置だから興味が無いのか、まるで自分達は門外漢だと言わんばかりの様子で、まったくと言っていいほど状況を把握していない様子だった。

「うちも、とりあえず止めてくれとしか聞いていません。全く、何があっただんだか」

アムロが、入口の守衛だけでなく、少し離れた場所に来た通りすがりの整備士やスーツ姿の官僚らしき関係者にも状況を把握していないか尋ねたが、やはり彼等はみな何も聞かされておらず、また確認

する意欲も特に無い様だった。

「全く……同じ連邦軍とは思えない暢気さだな。まあ、それだけサイド4（この辺り）は平和だという証拠なのかも知れないが」

呆れた様子でアムロがため息をつき、エイミーが同調して肩を竦める。

そこへ、守衛室の警報装置が鳴った。少し離れた位置に居たアムロやエイミーの耳にも、守衛の怒鳴り声はつきりと聞こえた。

「何だ！？ジオンの新型らしきモビルスーツが、コロニー内に潜入した！？」

連邦軍の内部では閑職の代表の様なサイド4で、まさか戦闘が発生するなどは予想だにしなかったのだろう。守衛が必要以上に大きな声で電話口に向かって怒鳴った直後、エア漏れの警報サイレンが、コロニー中に響き渡った。

「何だ！？コロニーに穴を空けて侵入したのか！！なんて奴等だ！！」

守衛室にアムロとエイミーが駆け寄り、落ち着いた声でアムロが守

衛に尋ねる。

「ここにモビルスーツは無いのか!？」

「ジム?かハイザックしか在りませんよ!?!ここいらはグリプス戦役でも戦闘とは無縁だったし」

慌てた様子で早口で捲し立てるように言う守衛の言葉を手で遮り、アムロが無を言わせぬ強い口調で指示を出す。

「無いよりマシだ、貸してくれ。エイミー、行くぞ!」

「はい!」

冷静に頷く若いエイミーより無様な姿を晒したくは無いのだろう、守衛が一拍置いてから諦めた様な表情を見せたあと、格納庫へ向かって守衛室を飛び出した。

それを追って走り出すアムロに、エイミーが続く。

「宣戦布告も無しに攻撃とは、奴等にとっては、よほど俺が邪魔らしいな」

アムロが言った後すぐに、3人の視界に格納庫が入った。あちこちが錆びて手入れの片鱗も見られないライトグレーの波板で覆われた、如何にも辺境の地といった風情の格納庫へ彼らが飛び込むと、庫の外観には不似合いなほど小奇麗に整備されたジム？が2機だけ、彼らを待つていたかのようにポツンと立っていた。アムロとエイミーが、それぞれ軋み音を出しながら作動する油圧リフトに飛び乗り、コックピットへ急ぐ。

「ビームライフルとビームサーベル、散弾バズーカしか使えませんか！大丈夫ですか！？」

「シャッターの動作を待てない、ぶち破るぞ！」

「やむを得ません、やって下さい！」

「よし。エイミーはシャトルを援護、とりあえず駐機場所から発進させて、逃げられる進路を作ってやってくれ。逃げ道は外でもコロニーの中でも構わない」

「わかりました」

それぞれの機体が、ビームライフルと散弾バズーカを持ち、アムロ

の乗るジム？が格納庫のシャッターをシヨルダータツクルの形で破壊して飛び出し、エイミー機がそれに続いた。

庫外へ出てすぐに、アムロの機体上空へ、エイミーの機体と同じ方角ながら低空へ別れ、シャトルが居る筈の港を目指す。

コロニーはおよそ直径6kmの強化合金の円筒。老朽化が進んでいたテキサスは、近年になつて破断の危険性が指摘され、ハマーン<sup>II</sup>カーンの死後に余剰となつた軍用の部材を流用して外筒の補強が行われた為、少々の実弾攻撃程度では穴が空かない程度の強度に改善されている。

アムロのジム？がその中心付近まで高度を上げると、シャトルを駐機している方角に、モスグリーンのジオンらしき機体がまっすぐに向かっているのが見えた。

アムロが、意図的に地球用のドップラーレーダー（音波レーダー：音の反射時間で移動物体の位置を探知する）で探信音波を発射し、敵機と思われる機体の注意を自分に惹き付ける。

それを即座に探知したギラ・ドーガ6機のうち3機が、一斉にアムロへと進路を変えた。

「ちつ、残りはシャトルに直行か、敵ながら良い判断だ」

互いに突撃する形になり、キラ・ドーガがある程度まで近づいた所で、アムロが急上昇をかける。

キラ・ドーガがそれを追って、3機が一斉に上昇する瞬間、正三角形の重心を表すように、1点だけが重なった。その下は大きな広場。普段は公園として使われているが、空襲警報が鳴り続けているので勿論、誰も居ない。万一の戦闘に備え、コロニーでは射撃の的としてそういったスペースが確保されている。それを背後にして重なった敵機を、すかさずアムロがビームライフルで狙撃する。

「動きが正確すぎだ。もらった！」

最後部に居た一機が脳天から正中線を撃ち抜かれて爆発し、残り2機が左右にサツと展開する。直下の公園がビームに貫かれ、エア漏れするのに舌打ちするアムロだが、目の前の敵を倒さない事には自分も生きて戻る事は出来ない。再度キラ・ドーガに意識を集中する。

「そのための散弾だ」

背中に背負っていた散弾バズーカに手早く持ち替え、展開したキラ・ドーガの中心にアムロが散弾を発射すると、ちょうど双方のの中間点で散弾が破裂し、キラ・ドーガのそれぞれの機体の肩や腕に、雨霰の如く散弾がめり込んだ。

それが、ギラ・ドーガの肘や膝の動きを次々に奪った。それぞれ武器を構えようとして動かなくなった肘に戸惑い、ギラ・ドーガの動きが一瞬止まる。

この瞬間に、アムロのジム？が散弾バズーカを投げ捨て、片方のギラ・ドーガにビームサーベルで斬りかかり、真つ二つに切り裂いた。そのままジム？が横を通過し、直後にギラ・ドーガが爆発する。

残った1機は、何とか動く背中のバーニアを全開でシャトルの駐機場所へと逃げ出した。そのまま仲間を呼びに行くつもりなのだろう。

「ちいつ！逃がすかよ！」

アムロも、シャトルへと向かって、ギラ・ドーガを追った。

低空からシャトルへ向かったエイミーのジム？が、マンションや低層のオフィスビルの屋根ギリギリを掠めながら、シャトルの駐機場所へと急ぐ。

「もう少し、前へ行って頂戴……」

エイミーの狙いは、駐機場所の向こうにある、管理用のトンネルが集中する区画。向かう先で、コロニー内で居住区に被害を出さずにビームライフルで狙撃するには、そこしか狙えない。

エア漏れの警報が鳴った時点で、トンネル内に居る者も即刻退避するので、警報が鳴って暫く経っている今なら、遠慮なく狙える。

「……よし、そこっ！！」

エイミーの狙撃が、ギラ・ドーガの一機のコックピットと、もう一機の右足首を貫通した。

アムロから逃げてきた一機が、この閃光を見て、エイミー機をザクマシンガンで狙撃する。

エイミーは緑地帯を飛行中なので、実弾兵器であるザクマシンガンなら、敵機はコロニーに穴を開ける事も無く、左右に機体を振りながら避けるエイミー機を遠慮なく連射出来る。

「速い……！！」

撃ってくるギラ・ドーガは、ジム？のかなり後ろから追って来ていた筈なのに、全速力で飛行中のエイミーが、気付いた時には背中を取られていた。

「くっ……当たれっ!!」

機体を反転し、散弾バズーカを撃ち出すエイミー。だが、ギラ・ドーガの機体には当たらない。

散弾をかわした瞬間、エイミーが狙った機体が、更に後方からのビームライフルの狙撃に撃ち抜かれ、爆発した。アムロが急降下し、後方からエイミーと同じように狙撃したのである。

「まだ残ってる、急ぐぞ！」

アムロが、相変わらず冷静な声で、エイミーを促す。

「はい!!」

再び機体を反転させ、背面飛行の体勢から通常飛行に姿勢を戻したエイミーがアムロに続く。

その背中のバーニアを目で追うエイミーが、声に出さずにアムロに感嘆した。

”あんな隙を見逃さないなんて……さすがアムロ大尉だ”

そこまで心の中で呟いたのを、無線からのアムロの声が遮った。

「俺が上からギラ・ドーガを引き付ける、シャトルの援護、頼むぞ」

「はい！」

エイミーの狙撃で右足首を撃ち抜かれたギラ・ドーガの一機が、まだ無傷の機体に追い付けなくなり、やや遅れがちにシャトルへ向かう。ふくらはぎに付いている姿勢制御用のサブバーニアが破壊され、コントロールが上手くいかないのだろう。

アムロがもう一度ドップラーレーダーを使って探信音波を発信し、逃げるギラ・ドーガの注意を引く。だが、味方からの音声通信の内容に、思わずスピーカーに目が移った。

『フォンニブラウンからネエル・アーガマが出港、応援に向かって

います！」

小さなスピーカーから、先程の守衛の声が聞こえてきた。コロニーの設備が古いのだろう、通信に映像は入らず、割れ気味の音声しか入って来ない。

「ネエル・アーガマ！？ 改装中じゃなかったのか！？」

さすがに、ドック入りした筈の戦艦が応援に來ると聞いて、アムロの声が大きくなった。

「ドック入り直前に交戦の情報が入って、こちらへ向かって緊急発進したそうです！」

この交信を聞きつけた様子 of ギラ・ドーガが、突然戦意を喪失した様子で、侵入した穴へと引き返していく。

「逃がすかよ！」

アムロが二度、三度とビームライフルで狙撃する。エイミーが被弾させて速度が落ちていた機体はその火線に撃ち抜かれるが、無傷の一機はアムロとエイミーの連続狙撃をかわし切り、そのままコロニー外へ逃走していく。エイミーがそれを追おうとするのを、アムロ

が制止した。

「この機体で宇宙戦は危険だ、諦めよう。とりあえずエア漏れしている穴を塞ぐぞ。俺はさっきの広場へ行く、君は侵入箇所を頼む」

「わかりました」

2機のジム？が離れ、コロニーの損傷箇所へと急いで向かう。

アムロが先ほどの公園に到着とすると、避難の際に投げ捨てられたと思われるジュースの缶やスナック菓子の袋が、瞬く間に穴に吸い込まれていった。それを見て舌打ちすると同時に、手の指の間接に内蔵されているトリモチ状の粘着シートを次々に発射し、穴が空いた箇所を覆う。

エイミーも似たような状況に眉を顰めながら、作業を続けた。それぞれのジム？が何度かそれを繰り返すうちに、暫くしてエア漏れの警報音が止んだ。

「ふう、久しぶりにジムを動かすと、やはり思うように動いてくれないな」

アムロが眉間に皺を寄せながら独り言を言い、難しい顔で溜め息を

ついた。

「反応速度が遅いという事ですか？」

作業を終えたエイミーがいつの間にか、アムロのもとへ戻ってきていた。独り言を聞かれたと思っていなかったアムロが、一瞬はつとした表情になったが、すぐに我に帰り、エイミーの言葉に答えた。

「お疲れ様。警報が止んだという事は、そっちも上手く塞いでくれたんだな？」

「穴が大きかったので、粘着材を使い切ってしまいました。なんとか塞がりました」

「よくやってくれた。後は、ジムを基地に返して、とりあえず終了だな」

アムロは、例え小さなミスや隙があっても、戦闘終了後はエイミーに対し必ず労いの言葉を忘れずにかけるようにしている。エイミーに限らず、部下として連れを伴う場合は、みな同様である。

先程の戦闘でも、エイミーがバズーカの砲撃をかわされた後、本来ならばエイミー自身が自分で狙撃してギラ・ドーガを撃墜すべき

所であったのだが、アムロがフォロー出来るのならば、それを見せつけることで印象に残るようにし、次の戦闘に反映させる事を考えるように仕向ける。それがアムロなりの教育法なのである。

「先程の機体……やはりジオンでしょうか？だとしたら、この機体ではかなり難しいのでは……？」

エイミーがアムロに尋ねた。要は、ジム？ではギラ・ドーガのスピードについていけない、今回の戦争でジム？で勝つには、アムロと同レベルのパイロットが山のように必要ではないのか、という事である。

「確かに、あのスピードでは、ジム？でも難しいだろうな……」

アムロも、同じ意見のようである。

アムロが急上昇をかけた時、ギラ・ドーガは殆どタイムラグなしで旋回を開始していた。

更に、上昇中も、みるみる間隔を詰めて来ていた。反応速度も、かなりのものである事は、容易に想像できる。

「ネエル・アーガマが出て来たという事は、フォン・ブラウンの港

には異常がない筈だ、シャトルを出してもらおう。急ぐぞ」

アムロがエイミーに言った直後、また無線からの声が聞こえた。

『ネエル・アーガマが、サイド4空域に入りました！アムロ大尉、ネエル・アーガマの到着をお待ちになられた方がよろしいのでは？』

「折角だが、フォン・ブラウンに急がなければならない。新しい機体を試さなければならなくてな」

『慌てて出て来たので、積めるだけモビルスーツを積んで出て来た、研究対象も手違いで積んでしまったと言っています。大尉の目的の機体も、ネエル・アーガマが積んで来ているのではないかと』

「……………何だっ！？」

アムロの表情が険しくなる。

「確かなのか？」

『詳しくは分かりませんが、「研究対象」というのは、どうも一機だけじゃないらしいんです』

「一機じゃないってどういう事だ？ キュベレイの他にも、何かあるとでも？」

『それを、大尉ご自身の目で、ご確認頂いた方がよろしいと思うのですが』

念を押すように、守衛の声が言う。その言葉に、アムロが混乱する頭を落ちつけようと、しばらく沈黙して考え込んだ。

ネエル・アーガマが、今では軍事機密の筈のキュベレイ Mk - ? を軽率に持って来ているかも知れないというだけでも、アムロにとっては十分な驚きなのに、この上アムロが驚くような隠し球があるかも知れないというのである。

アムロは、本来ならば機械好きなので楽しみと言いたいところだが、状況が状況である。軍事機密にするべき機体を簡単に持ち出すような、軽率な行動を慎むように釘を刺しておく必要があると感じていた。

また、今回の襲撃は、まず間違いなく自分を狙ったものだろうから、これ以降は丸腰の民間機より、反撃が可能な戦艦にいる方が、民間人を巻き込まずに済むし、自分も安全ではないかとアムロは考えた。

「そうだな。わかった、ここでネエル・アーガマの到着を待たせてもらおう事にしよう。シャトルからはここで降りることにするから、機長に伝えて貰えないか」

『了解しました。シャトルには管制から伝えます。ネエル・アーガマ到着まで、先程の格納庫を通り過ぎた突き当たりに、事務所があります。そちらへどうぞ』

「ありがとう、世話になるね。そうだ、到着までシャッターの修理、手伝おうか」

『錆び付いて開かなくなっていましたから、いずれにしても業者に頼む予定でした。お気になさらずに』

守衛の声が苦笑気味に笑った。

その後、一応、ジム？を元の位置に戻し、アムロとエイミーが事務所に入ったあと、10分程でネエル・アーガマが入港すると、連絡が入った。

それと入れ替わるように、フォン・ブラウンの安全確認後、シャトルが管制の誘導に従い、出発していった。

同じ頃

「アムロ・レイの救援に、ネエル・アーガマがドック入りを中止して、テキサスに向かった」

サイド1・ロンデニオンを拠点とする新造艦「ラー・カイラム」にも、ネエル・アーガマが緊急発進したという報せは、当然伝わってきた。

その報せは、同じ連邦軍のルナの父・ユウキにも、当然入ってきた。ユウキがそれを聞いた時、まさかトウマが乗っているとは、夢にも思わなかったのだが。

「これからオーバーホールしようなんて艦を出したら、今の連邦軍にまともな戦艦が無いのが丸分かりじゃないか。もう少し考えろよな……」

哨戒勤務でジム？に乗り、同僚と共にラー・カイラムから宇宙へ出ていたユウキが、サイド4の方角を見ながら呟いた。

今のところ、サイド1・スウィート・ウォーターでは、ジオン共和国建国祭直前の暴動鎮圧後、まだ目立った動きは無い。

だが、ギラ・ドーガの分析も終わり、間もなくユウキが所属するロンド・ベル隊に、新型モビルスーツ「ジェガン」が配備される事になっている。

『この時期に新型が製造されるという事は、現行の戦力では勝ち目が無いという事なのかねえ？』

一緒に哨戒にあたっていた同僚が、無線で声をかけてきた。

「恐らくそうだろうな」

トウマたちの事が気掛かりであったユウキは、同僚の質問に生返事で答えた。

相手は元々ロンデニオンに居たため、トウマ達の事をまだ知らない。ルナやトウマの心情を思う時には、ユウキには、どんな会話をしていてもちゃんと耳に入って来ないため、どうしても気の無い返事になってしまう。

『しかし、仮にそうだとすると、根拠は何処にあるんだろう？今の連

邦軍の懐具合で、わざわざ新型を開発するほどの予算を組むということは、それなりに確実な根拠が必要な筈だよな?」

「事情はよく分らんが、ネエル・アーガマが出たのと、関係が有るんだろう。アムロⅡレイが絡んでるといふ事は、ガンダムも造るかもな」

そんな会話をしている所へ、緊急通信が入った。

『二人とも戻れ。ジオンと思われるモビルスーツとアムロⅡレイが、テキサスで交戦したと連絡が入った。緊急訓示を行う』

「……………何ですって!?!」

無線から聞こえた内容がにわかには信じられず、ユウキと同僚が同時に聞き返す。

『詳しくは戻ってからだ。すぐに帰還しろ』

無線の向こうの声、ラー・カイラムの艦長であるブライトⅡノア大佐の声も、普段より、かなり低い。恐らく苦虫を噛み潰したような顔をしているのだろう。声は低いまま、話し方に全く抑揚が無い。

「了解！」

2機のジム？が、メンバーニアを吹かし、母艦へと戻っていく。

「コウイチたち、無事だと良いが……」

コウキが呟き、もう一度サイド4の方角をちらりと見た後、ジム？  
がラー・カイラムに着艦した。

ラー・カイラムの会議室。ブライトが小さなホワイトボードの前に  
立っている。

パイロットや持ち場の合間に話を聞ける者が、狭い会議室に全員集  
まった前で、ノイズ混じりの音声を再生している。声の主は、誰も  
が一度は、聞いた事のある名を持つ人物と思われた。

「文字にすると長いから、新聞で読むのは大変だろうが、音読され  
ているなら、それほど長くは無い文章だ。心して聞いてくれ」

ユウキの予想通り、ブライトは忌々しげな表情で、居合わせたクルーたちを見回した。

『私の名はシャア』アズナブル。過去に私の名を聞いた方も、多数おられるかと思う。私はかつてエウーゴと共に、地球至上主義を唱える者と戦い、地球から全ての人を宇宙に導く事で、地球を救おうと試みた。だが、あるうことかジオンを騙る軍により、穏健派であった父・ジオン』ダイクンの理想は踏みにじられ、武力による地球圏の制圧が行われ、多くの若者が欺かれたまま、命を落としていった』

演説にしては熱を感じられない、落ち着いているが、どこか無表情な声。

『この事実には、私は深く心を痛めている。二度とこのような愚行が起こらないよう、今一度、父ジオンの名を拝借し、地球を汚染する愚行にピリオドを打つため、私に力を貸して頂ける同志に語りかけたい。今はまだ、我々が動くべき時期ではない。だが、来たるべき時に備え、準備は整いつつある。然るべき心積もりをお願いしたい。我らが地球の未来のために。そして、全ての人類をスペースノイドとし、恒久的な平和を掴むために。ジーク・ジオン……！』

AMラジオと思われる、やや割れ気味の音声。だがブライトは、かつてクワトロ』バジーナを名乗っていた頃のシャアと同じ艦に乗っていたのである。聞き間違ふことなど、ほぼ有り得ない。

「合成音声じゃないんですか？ダカールであれだけ派手に演説したんですから、今のコンピューターなら、あれを元にして簡単に作れると思いますけど」

クルーの一人が、いかにも胡散臭いと言いたげな顔で質問した。

「確かにその可能性は否定できない。だが、実際に毎日顔を合わせていた者としては、恐らく本人だと思う、と言わざるをえない」

「しかし、何でまた、今になってこんな事を？」

「はつきりとは判らん。ザビ家の血族がジオンを名乗るのが嫌になつたか、エウーゴではもはや時代遅れと感じたのか。いずれにしても、俺と手を組む意思は無さそうだという事だけは、確かなようだ」

ブライトの声は低いままである。

「しかし、今回のジオンと思われる襲撃では、いずれも一般兵ですし、今のところシャアと思われるパイロットは姿が見えません。常に前線に出て来る性格のシャアが、ここまで姿を見せないっていうのは、ちょっと不可解だと思えますが」

ずっとブライトと同じ艦に乗っている、アストナージ・メドツソが声を出した。無論、彼もシャア本人を知っているし、その搭乗機であった「百式」の整備も担当して、戦闘の癖までおおよそ把握している。それだけに、今回の一連の流れには、違和感があった。

「もしかしたらこれは、ただのテロ組織の扇動かもしれない。だが、グリプス戦役以後、シャアの遺体が見つかっていないのも確かだ。それに、百式が発見された時、コックピットのハッチは損傷も無く開いていたし、血痕も無かった。生きていても不思議ではない、と言わざるをえない」

ブライトの言葉に、アストナージがいまいち腑に落ちない顔をするが、反論できる材料も見つからない。

「今回のロンド・ベル隊への召集にあたって、ジム型の新型の配備が決まっている。おそらく、いずれガンダムも造らなきゃならんのだろっ」

ブライトが、小さく溜め息をついた。

「アナハイムで、もう造ってるんじゃないですか？ガンダムも」

冗談で言ったつもりだった若いクルーが、その場に居た全員に、射抜かれるような視線を浴びせられた。

同じころ、ネエル・アーガマの艦内。

アナハイムの整備担当者・レイジー＝ハウアーが、ネエル・アーガマの整備デッキに鎮座したキュベレイMkⅡの足元で、くしゃみをしている。

彼も、さきのフォン＝ブラウン襲撃時に偶然居合わせてしまい、整備要員が足りない、特にキュベレイの調整が他に出来る腕の持ち主が居ないからと、半ば無理やり連れて来られた一人だった。

「レイジーさん、風邪ですか？」

工具箱を抱えてきたトウマが、何気なくレイジーの顔を覗き込んで尋ねたのに対し、レイジーは如何にも不機嫌そうな、しかし慣れた様子で顔をしかめた。

「どうせ誰かが、アナハイムの事でロクでもない噂をしてるんだろ」

宇宙に上がるとニュータイプになれるというのは、あなたがち間違いではないのかもしれない。

### 第13話 ニュータイプの片鱗 (前書き)

ネエル・アーガマの整備デッキで、「ろくでもない噂」にくしゃみをするレイジーに、声を掛けたパイロット。

それは、キュベレイの整備具合を尋ねに来た、アムロだった。

### 第13話 ニュータイプの片鱗

「キュベレイMk-?の調整、うまくいきそうか?」

ブリッジの艦長席でグリードと顔合わせを済ませ、テキサスからトウマ達と合流したアムロが、2人に尋ねた。

トウマは、この時がアムロと初対面になる。テレビで何度か聞いたことが有る声と、その時に見た事のある顔が自分に向ってくる事に、まるで何かの番組収録で芸能界のスターと共演しているような興奮を覚えたが、あと数歩という距離までアムロが近づいてくると、意外な空虚感を覚えた。

”この人があのアムロ”レイか。思っていたよりも普通の人なんだな。俺と身長も体格も変わらないじゃないか。空手で勝負したら、もしかしたら俺の方が強いかも……?”

そんな妄想じみた事を考えているトウマをよそに、レイジーとアムロの会話が進み始めていた。

傍で見ているトウマの目にも、比較的表情に余裕のあるレイジーに対し、むしろアムロの方がやや神経質な表情に見える。伝説のニュータイプにしては随分気弱な感じだと、トウマの意外感が先ほどよりも更に増大していく。

「とりあえず、制御系は復旧させました。ファンネルの砲撃のエネルギー、充填します?」

「いや、暴走してくれたら困るし、俺自身もまだ使いこなせる自信は無いから、とりあえず動けば良い。テストは出来るか?」

レイジーが、当然と言わんばかりに、大きく頷く。

「キュベレイ本体からエネルギーを供給するタイプのアポジモーターで制御しますから、動かすだけなら、いつでもいけますよ」

「今、行つてきても良いか?」

「もちろん」

レイジーがブリッジに模擬戦の許可を申請し、キュベレイMkII?の発進準備が始まった。整備デッキから全員が待避し、各所のエアハッチが閉じられる。

「総員待避完了、エアハッチ封鎖確認完了!発進、どうぞ!」

「キュベレイMk-?、アムロ、出ます!」

ライトグレーのキュベレイが、ネエル・アーガマのカタパルトから飛び出した。

「挙動そのものは、特に変わったところは無いんだな」

ネエル・アーガマから数百mの距離までエンジン全開でキュベレイを飛行させたアムロが、意外そうな声を出す。

「ファンネルの操作中は、機体がお留守にならないように姿勢制御の補助にも使いますが、通常はリック・ディアスや百式あたりと差して変わりません」

ブリッジに上がったレイジーが、艦長席の傍らのレーダーやモニターを見ながら、無線で答える。

「ファンネルの操作は、念じるだけで動くのか?」

「恐らく言葉だけでは、思うように動かないと思います。自分の位置を「0・0・0」と仮定した3次元の座標に置き換えて周囲を把握して、この座標位置に居る敵機を攻撃、という雰囲気で指示して

みて下さい。自機の腹から前と目線より上を＋、背中から後ろと目線より下を・と固定するのが分かりやすいと思います。明確な基準が必要なら、地球の自転軸と公転面を基準にして、北を上、南を下に固定するのが良いかも知れません』

アムロは集中するため目を閉じ、レイジーが言うように、自機を中心に頭の中で座標を展開する。

昔の3次元CADやポリゴンのような、四角い空間のイメージが浮かび、その中心に自機・キュベレイ、そしてネエル・アーガマ、一年戦争時代の残骸など数多の物体が、次々にプロットされていく。その中で、何かが動いた。

「いま、ネエル・アーガマから何か出撃しなかったか？」

『何機出たか、把握出来ますか？』

レイジーの質問に、アムロがさらに集中し、動く物体を探る。レイジーは、レイジーの意図を把握し、わざと電源を落としている。

「とりあえず、強い存在感を持っている1機しか分からない。実際は何機出た？」

『ガンダムとジム？が2機です。敵役を頼んでますから、両者、画像での疑似砲撃戦を開始して下さい』

「了解」

再びアムロが、キュベレイMk-?のレーダーを復旧させる。

だが、ガンダムの位置だけは、レーダーを見なくてもはつきりとかかった。勘というより、映像に近い、不思議な感覚。

「そう言えばシャアはあの時、セイラさんへの攻撃を途中で止めた。ララアは、こんな感じで特定の機体を探る事が出来たのか……？だとしたら、ララアはセイラさんである事を把握出来たということかならば……！」

さらに集中力を上げ、ガンダムのパイロットが誰なのかを探る。

「トウマ君か!？」

『正解です、アムロ大尉!』

トウマの操縦するガンダムが、ビームライフルでアムロのキュベレ

イを狙撃する。

だが、アムロはプロのパイロット。それも、「白い悪魔」と全てのジオン軍兵士から畏怖された、伝説のニュータイプとまで言われる存在である。さすがに、相手が素人と分かれば、意地でも当たる訳にはいかない。

「行くぞ、トウマ君！ファンネルっ！」

迷いの一切無いアムロの意思に従い、キュベレイの両肩と、尻尾のようなテールバインダーのカバーが一斉に開き、漏斗のような形の遠隔砲撃装置「ファンネル」が飛び出す。

「あれがファンネルか」

モビルスーツと比べると随分小さい。その小ささに、トウマが思わず拍子抜けし、やや間の抜けた声を出す。だが、モビルスーツとは比べ物にならないすばしっこさで、ガンダムとの間隔を一気に詰めてきた。

「うわっ、速っ！」

慌ててトウマが操縦レバーを握り直す、既に自動操縦の方がファ

ンネルの連続砲撃に反応し、回避運動に入っていた。

その俊敏な動作を、一挙手一投足を食い入るように見ながら、トウマが追隨するように操縦レバーを動かす。件の自動操縦の音が、明らかに以前より反応が速いトウマに、助け船を出す。

『まだ少し、私の方が速いです。もう少し、先を読んで操縦すれば、追いつく筈です』

「機械のくせに、言ってくれるじゃないか……！」

トウマの目が、次第にファンネルを捉え始めた。

「そこだ！」

トウマの操縦どおりの砲撃。しかしファンネルがそれをかわし、そのまま砲撃で逆襲してきた。

「くっ……！」

ガンダムが自動操縦で右横にビームをかわす。だが逃げた先に、狙い済ましたように別のファンネルの砲撃が飛んできた。

「読まれてる……！そうか、先を読むってそういうことか！それならば……！」

今度はトウマの操縦でかわし、すぐさまビームライフルで連射する。

「戦闘中に腕を上げている、良いセンスをしているようだな」

ファンネルを追いつつ、次第にキュベレイ本体にも砲撃が飛んでくるようになり始めた。その急激な成長を見せるトウマのガンダムの動きに、アムロが感心したように言った。

トウマの砲撃が全く当たらないのは、単純に相手がアムロだからである。並みのパイロットなら、とうの昔に撃墜されているだろう。

アムロがそんな事を考えている最中に、頭の中の三次元座標の片隅で、何か「侵入」してきた気配を捉えた。

「何かが動いた！模擬戦中止だ！」

反射的にアムロが叫んだ想定外の言葉に、トウマの顔がひきつる。

「ちよっ……マジですか!？」

『アムロ大尉、コウイチ大尉! トツテイ少尉がギラ・ドーガでビームライフルを持っていきます。他の機体は、識別信号を連邦に切り替えて! 忘れたらガンダムに狙撃されます』

無線越しにレイジーが落ち着いた声で、しかしテキパキと要点を指示する。

「俺、戻ります! 実戦なんてまだ無理!」

トウマがパニックになって、助けを求める。だが、アムロがキュベレイをガンダムの横につけて肩を掴ませ、引き返そうとするトウマを制した。

『今のファンネルを狙った感覚を思い出せ。普通のパイロットなら、狙う事すら出来ない。あれが狙えるなら、モビルスーツなんて、はるかに大きいだ』

「しかし……!!」

『さっきファンネルの狙撃をかわせただろ? ファンネルの狙撃の夕

イミングは外見からは分からないが、モバイルスーツがビームライフルで狙撃するなら、必ず引き金を引く。それを見逃さなければ、簡単にかわせる。大丈夫だ』

トッテイのギラ・ドーガが到着し、ビームライフルを各機に渡していく。

『ファンネルのエネルギーは、いまから充填できないのか？』

アムロがレイジーに尋ねた。その質問に、レイジーがやや困惑気味に答える。

『出来ませんが、予め充填しておかないと機体のエネルギーを食いますから、戻れるだけの残量が残りませんよ？』

それを聞いて、アムロがファンネルのエネルギースイッチを入れる。

『つまり、仲間に入れて帰って貰えば良い訳だ。トウマ君、そういう事だ。終わったら、俺をネエル・アーガマに連れて帰ってくれ。いいな？』

「俺がですか!？」

『モビルスーツも車と同じさ。自分がハンドルを握る以上、どんなに困ろうと最後は自分が何とかしなければならぬ。そういうものだ』

「さっきと言ってる事が違うじゃないですか!!」

『突っ込める程度に頭が回っているなら、大丈夫だ。来るぞ!』

アムロの声が真剣になり、空気が変わる。各機がライフルを構え、迎撃体勢に入る。

『トウマ君は最後尾で援護。俺とコウイチが前、他は中盤で俺達が撃ち損じた機体を潰してくれ。行くぞ!』

アムロのキュベレイとコウイチのジム?を先頭に、全機がネエル・アーガマから距離を取るため、敵機に向かってバーニアを吹かす。

『射程範囲内に敵機反応を確認。狙撃しますか?』

自動操縦の音が、相変わらず抑揚の無い話し方で尋ねる。

「そっか、俺が全部を動かす必要は無いだよな」

『任せるべき所はお互いに任せるべきです。その方が生存率が高くなります』

「アムロさんは撃ち損ねた機体を潰せば良いと言っていた。味方が危なくなるまでは、任せよう」

『了解』

高倍率ズームで、前線のアムロとコウイチの戦闘を暫く傍観する。だが、ビームの狙撃が中盤まで来ているように見える。そのうち、トウマのガンダムにも、狙撃が来た。

「うわっ！もう突破された!？」

『識別無しの熱源』

「早く撃てよっ!」

トウマが、敵のものと思われる、ファンネルらしき樽のような形の飛来物を狙撃する。数回撃ち合った後、ついに飛来物の狙撃に成功

した。

「やった！」

『新手が来ます』

「まだ来るのかよ!？」

今度は同じ物を敵と認識したらしく、自動操縦のレーダーでも追尾を始めた。だが、今度はトウマも負けてはいない。

「2つ来てるな」

左右に1つずつ、また樽型ファンネルらしきものが飛来する。だが、操縦者が未熟なのだろうか、動きが完全に左右対称である。

「左を頼む、右を狙撃する！」

『了解』

自動操縦で、ガンダム本体は左の樽に突進しながら左手でビームサ

レベルを抜いた。一方で、右手はトウマの操作で、右の樽にビームライフルの照準を合わせる。

「当たれっ!!」

トリガーボタンを押し込み、連射する。最初の2発はかわされたが、3発目の狙撃が、右の樽を捉えた。同時に、ビームサーベルが左の樽を叩き斬る。

「よし!!」

『トウマ君、もう少し前へ! キュベレイが押されてる!』

「えっ!?! りよ、了解!」

レイジーの声に、トウマが思わずどもる。アムロが押されるなど、予想外だったからである。

『ここから狙撃しますか?』

「ここからじゃ俺には無理だ、味方に当てるなよ?」

『多分、大丈夫です』

「……………取り消した方が良いか？」

『やってみるわ』

「やっぱやめ」

トウマが言い終わる前に、ガンダムが数発、戦闘が激しい空域にビームを撃ち込む。

リーダーの、敵を示す赤い表示・Eマークが一つ消えた。同時に、メインバーニアを全開で吹かし、その空域へガンダムが突入する。

「おい、いま俺は止めただろ！？なんで撃った！？」

『先ほどの武器が、味方機に近づいていたからです』

「……………！？そんなの分かるのか！？」

『敵機が味方機に近づいて、先ほどの武器を放出した直後を狙撃しました。来ます』

「あれか!!」

やはり2つ、先ほどと同じ樽が、左右対称の動きで飛来する。だが、今度はやや距離がある。トウマが一撃で一発ずつ、確実に仕留めた直後、ガンダムが戦闘空域に踏み入る。

「父さん、危ない!!」

言い切る前に勝手にトウマの体が動き、ジム?の背中にビームサーベルを降り下ろしたギラ・ドーガをハイキックで蹴り飛ばす。ガンダムがその直後に砲撃を放つと、勢いに飛ばされながらギラ・ドーガがコックピットを撃ち抜かれ、爆発した。

『すまんトウマ、助かった』

「アムロさんは!?!」

『爆発した!?!』

「!?!」

コウイチ機の丁度正面、200mほど先で、大きな火球が輝いた。それを見たトウマの叫びと同時に、ガンダムが弾かれたように飛び出す。

「アムロさん!!」

火球の向こうで、キュベレイがギラ・ドーガとは違う雰囲気の機体と、激しい撃ち合いをしている。その敵機の背中とふくらはぎから、例の樽が放出される。だが、その樽は先ほどのものよりふたまわりほど大きく、砲口もそれに見合った大きさ。

しかも、その図体に似つかわしくない速さで展開した。その数は6個。一瞬でアムロのキュベレイを取り囲み、激しい連続砲撃を加える。

「なめるなよ……!!こんなものでっ!!」

アムロの一回目の狙撃で、ファンネルが弾切れになる。エネルギー充填をしなかったツケがこんなところで来ようとは、流石のアムロも想像だにできなかった。

「なっ……!!」

アムロの叫びが終わらないうちに、ガンダムの連続狙撃が、全ての樽を撃ち抜いた。更に続けた最後の1撃が、キュベレイと敵機を引き離す。

「このおっ!!」

トウマがさらに連射して、敵機を防戦一方に追い込む。樽を破壊され、追い詰められた敵機が、発光信号を打ち上げ、次々に戦闘を中止し、引き上げていく。

「逃がすかよ!!」

『トウマ君、よせ!ライフルの残量を見る!!』

アムロの声に、トウマが反射的に残量表示を見る。残量は空になっていた。

「……!!」

グレーのキュベレイが、ガンダムの肩に手を置く。

『ありがとう、助かったよ』

「もう少しだったのに……」

『補給しなければ戦えない、一度戻ろう』

「……はい」

がつくりと肩を落とすトウマだが、アムロの言葉に頷いた。

『トウマ、大丈夫か！？』

コウイチが、トウマの向かった先の激しい爆発を見て、慌てて飛んで来た。

「俺は大丈夫だよ。そういえば、アムロさんのキュベレイ、もうエネルギー残量が……」

『覚えていてくれたか』

アムロが安堵の声を漏らした後、キュベレイがガンダムとジム？に抱えられ、ネエル・アーガマに戻った。

『あまり無茶をなさらないで下さい！両脇を抱えられて来るものだから、何事かと思いましたがよ！』

ネエル・アーガマの整備デッキに引き上げて来たエイミーが、思わずアムロを叱責する。

「俺達は訓練のつもりで出ていたんだ、仕方が無いだろう」

『それにしあって、もう少しやり方というもの』

「！！」

「まあまあ、全員無事に戻ってきたんだし、アムロだって初めて乗る機体でいきなり実戦に巻き込まれたんじゃ、無理も無かるう。それよりも、取り敢えずさっさと戻って休もうぜ、お嬢さん」

コウイチの疲れた声に、エイミーの反論が途絶えた。初めて乗る機体でいきなり実戦に巻き込まれた、というコウイチの指摘も、理解出来ないではない。エイミー自身も、初めてのモビルスーツ搭乗時

には、ジム？で模擬戦の最中に尻餅をつくという失態をやらかしているだけに、その難しさは、彼女自身も痛感している。

「どうやら、他の機体も無事の様だな」

口調が変わらないまま、コウイチが安堵の息をつく。他の機体も若干の損傷はあるものの、各機とも無事生還して来ていた。

「お疲れ様。よく無事で戻ってくれた」

グリードが艦長席から下りてきて、ブリッジへ帰還の報告に来たパイロット達を労う。

「特にトウマ君、よく頑張ってくれたな。ありがとう」

グリードが笑顔で、トウマの肩をポンポンと叩く。

「もう少しで、やつらを潰せたのに……すみません、逃がしちゃって……」

意気消沈のトウマの様子を見て、アムロが言う。

「君が居てくれなければ、俺は殺られていただろう。奴等を最初に潰せなかった、俺たちが責任を感じるべき状況だ。君が負い目を感じる事は無いさ」

「アムロさんがガンダムに乗っていれば、あんな奴等」

トウマが言おうとするのを、アムロが制した。

「あの状況では、俺以外がキュベレイに乗っていてもファンネルを動かせなかったし、もし君が「自分はメカニックだから乗らない」と言ってガンダムに乗ってくれなかったとしたら、俺はこうしてお喋りなんか出来なかった筈だ。もう暫く、この体制が良いと思うんだが、トウマ君はどうだ？」

アムロの提案に、トウマが目丸くする。

「俺がアムロさんを差し置いて、ガンダムですか！？」

「理由は幾つかある。一つは、俺がまだファンネルを完全に使いこなせていないこと。もう一つは、君が一人だけでモビルスーツを操縦して戦うには、まだ不安があるが、自動操縦を併用すれば、かなりの潜在能力を発揮できること」

アムロの意外な言葉に、トウマは呆けたような顔をしている。

「さっきの模擬戦以降、ファンネルを狙撃出来たのも、半分は自動操縦のおかげだろうが、それだけでは俺を助けに来る事は出来なかった筈だ。だが、今のトウマ君では、自動操縦が無いと完全に力を発揮できないようだし、他の機体の性能では、多分、今のトウマ君の腕では、まだ生き残れない。戦力としてトウマ君を活かすには、現状ではガンダムが一番だ。俺たちも戦闘が楽になるし、トウマ君自身も、生き残る事が出来るだろう」

アムロの表情は、至って真面目である。

「でも、それじゃ、新しいガンダムのテストにはならないんじゃないか…」

「いずれは、俺もロンド・ベルに合流することになるから、それまでに新しいガンダムを造らなければならない。だが、今の状況では、あのガンダムをサイド1に持って行ってしまったら、この空域がお留守になってしまう。だから、俺が乗るガンダムは、別に造って貰うつもりだ。だが、間違い無くファンネルは新しいガンダムの主兵装として使える武器になるという手ごたえはあった。俺のガンダムが完成するまでは、キュベレイでファンネルの訓練を続けたいという意味合いもある」

トウマが、困惑を隠せない表情のまま、コウイチをちらりと見る。コウイチは、アムロの顔をちらりと見て、話の続きを聞くと、無言で諭す。

「それに、俺が自動操縦付きに乗っていても、顔を出してくれないから、意味が無い。君みたいなパイロットが戦力になるように、あのガンダムの自動操縦機能の普及が可能かどうか、研究に力を貸してくれないか？君みたいな、自動操縦があれば俺にも引けをとらないというパイロットを増やす事が出来れば、より早く戦争を終わらせる事が出来る」

アムロの最後の言葉が、戸惑うトウマの背中を押した。

”俺が戦争を早く終わらせる鍵になるかも知れない？……そうだ、それなら俺の手で、戦争を終わらせる事が出来るじゃないか。そうすれば、ルナとまた何時でも会えるようになる！！”

トウマの表情が、徐々に困惑から、まるでルナとのデート前日のような、浮かれた表情になっていく。やがてその表情のまま、トウマが小さく頷いた。

「先程の戦闘で、少し気になることが」

その会話に割り込むように、エイミーが遠慮がちに、アムロに向か

って言った。

「樽型の遠隔操作砲の事ですが、ワイヤーのようなものが付いていたりいなかったり、何種類か制御の仕方に違いがあるように見えましたので、何か参考にならないかと思って」

「ワイヤー？」

パイロットたちが互いに顔を見合わせる。

「2個一組で左右対称に動く奴は有りましたけど、ワイヤーまでは見ていませんでした……キュベレイのファンネルを見た後だったから、全部無線だと思い込んでました。ああ、そういえば、本体が撃墜された後でも、目標に向かっていくようなものが有ったらしいです。ガンダムが言っていましたよ」

トウマが、思い出したように言う。

「パイロットの能力に合わせたら違うものになったのか、たまたま色んなものを試しているだけだったのか……。その本体を潰された後でも目標に向かっていくって奴は、かなり厄介だな。本格的な思念波コントロール式なのか、只のホーミングミサイルを撃つたら偶然そう見えてしまったのか、判断がつかん」

眉間にしわを寄せるコウイチの言葉に、アムロが付け加える。

「いずれにしても、我々の予想より、遙かに奴等は本気だということだな。それに、ちゃんとした開発能力と、それにつき込めるだけの資金源もある。そこらのテロとは、訳が違うということだ。だが、我々は勝たなければならぬ」

「ずっと傍に居て欲しい人たちを、自分の手で守るために。そして、ずっとみんなが平和に暮らせる世界を創るために」

トウマの、青臭いと評されても仕方のない言葉。だが、苦い現実をいく度も経験してきたはずの、トウマを困む歴戦の面々は、誰もその言葉を否定はしなかった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9097p/>

---

機動戦士ガンダム 届かなかった祈り

2011年10月6日20時43分発行